

# 『華嚴經』と教育（五）

古田 榮作

## 要旨

善財童子の求道の旅は続く。本稿では、妙徳円満天、瞿夷の二人の教えで、菩薩の十地を極め、更に摩耶夫人、天主光童女、遍友童子、善知衆藝童子、賢勝優婆夷、堅固解脱長者、妙月長者、無勝軍長者、尸毘最勝婆羅門、徳生童子、有徳童女に教えを受ける。摩耶夫人以下の善知識から解脱を説かれ、徳生童子と有徳童女の二人からは善知識の果たす役目、善知識に依って可能となることなどを教示される。

キーワード…善財童子、善知識、求道、解脱

善財は妙徳円満天を探して釋尊誕生の地である流彌尼園<sup>(1)</sup>に向かった。物語は場面を天上の世界から地上へ舞台を移す。これまでの夜天とは異なる林天<sup>(2)</sup>こそが求むべき善知識なのである。諸々の寶で飾られた樓閣の上に坐り、二萬那由他の諸天に囲まれて、菩薩受生海經を説いておられる林天に見えた善財は、林天から菩薩の十種の受生法を教示される。

菩薩有十種受生法。若有菩薩行是法者生如來家。於念念中長養善根。不退不怖不惱不亂。不懈不悔至一切智。順知法界修解脫道。於一念中。長養一切諸波羅蜜。捨離世間具足佛地。智慧猛盛佛法現前。順眞實義滿薩婆若。何等爲十。所謂供養一切佛方便虛空願藏菩薩受生法。滿菩提心枝藏菩薩受生法。現前方便觀察寂滅虛空藏菩薩受生法。以淨直心普照三世藏菩薩受生法。生如來家藏菩薩受生法。佛光明力藏菩薩受生法。具足分別薩婆若門藏菩薩受生法。一切法界化莊嚴藏菩薩受生法。勇猛精進至佛地藏菩薩受生法。<sup>(3)</sup>

もし菩薩がこの法を実践するならば、如來の一門に加えられ、一念一念のうちに善根を育て、退かず、怖れず、悩まず、乱れず、懈らず、悔いぬようになり、一切智<sup>(4)</sup>を獲得し、佛になるべき素地を具え、佛法の世界を知り、解脫の道を修め、一念のうちに一切の波羅蜜を持ち、世間から離れ、佛の境地を具え、智慧にあふれ、佛の法を目の当たりにし、眞實の義に順じて薩婆若<sup>(5)</sup>を満たすであろう。因みに第一に掲げられた供養一切佛方便虛空願藏菩薩受生法はより詳しくは「佛子。何等爲供養一切佛方便虛空願藏受生法。此菩薩摩訶薩。發如是願。我當恭敬供養一切諸佛。無量喜心見佛無厭。具不壞信積集功德。供養諸佛心無厭足。佛子。是爲初受生法。薩婆若初門長養善根故。」<sup>(6)</sup>と發願すること、端的には不壞の信を抱き、功德を積み、厭くことなく諸佛を供養することなのであり、それは佛と一体化することへの第一歩であり、善根を育成することなのである。

妙徳円満林天は方便虛空願藏菩薩受生法にはじまり勇猛精進至佛地藏菩薩受生法までの十種の受生法を縷々解説した上で、偈で

清淨正直心	先發如是願	普見一切佛	供養無厭足	皆悉淨莊嚴	三世諸佛刹	以願莊嚴心	度脫諸群生
修習寂滅法	其心無厭足	三世無障礙	身心如虛空	深入大悲海	直心如須彌	窮盡大智海	是爲人中雄
大慈覆一切	增廣諸度海	教化諸群生	此是無上人	知法眞實相	三世佛家生	究竟諸法海	是爲智慧者
清淨妙法身	其心無障礙	己身滿十方	具足如來力	甚深智慧中	速得自在力	專求一切智	究竟三昧海 <sup>(7)</sup>
嚴淨諸佛刹	教化一切衆	顯現自在力	是爲稱莊嚴	深入最勝力	長養薩婆若	法界無障礙	此是眞佛子

と総括した上で「菩薩摩訶薩。具此十法。生如來家爲世間燈。」<sup>(8)</sup>とこの十法を満たせば、佛法を奉ずる一員となり世間の燈となるとし、「我成就此無量境界自在法門。」<sup>(9)</sup>と断言する。善財の「此法門者境界云何。」<sup>(10)</sup>との問いに「我已具足一切菩薩受生大願。是故我來此林中。本願力故。正念菩薩受生之法。於後百年。菩薩從彼兜率陀天。降神下生。時此林中有十種瑞相。何等爲十。一者此林忽然廣博地平如掌。二者土石雜穢變爲金剛衆妙莊嚴。三者寶娑羅樹周匝行列。四者時此林中沈水末香。出過諸天種種莊嚴。五者諸妙華鬘寶莊嚴具皆悉充滿。六者諸寶樹中自然流出種種妙寶。七者諸池水中出芙蓉華。八者時此林中娑婆世界欲色諸天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽。恭敬作禮合掌而住。九者天女乃至摩睺羅伽女。齋供養具。合掌恭敬於一面住。十者十方一切佛齋中放光明。名曰菩薩受生自在燈。普照此林。於彼一一諸光明中。現一切佛受生自在出家自在。一切菩薩功德自在。又出如來微妙音聲。佛子。是爲林中十種瑞相。此相現時。諸天王等。知必當有菩薩下生。我見此瑞歡喜無量。」<sup>(11)</sup>と応じ、私は一切菩薩受生大願を既に具足したので、この流彌尼園の林中に來生したし、本願力により菩薩の受生の法を正念し、百年後に菩薩は兜率陀天より降下して下生するものである。この流彌尼園の林中には十種の瑞相<sup>(13)</sup>が現れ、諸々の天王等は必ず菩薩がいて當に下生すべきはずだと知っており、私はこの瑞相を見て歡喜すること無量である。妙徳円満天は、最初の如來の無壞自在幢の乳母離垢光であったという過去譚<sup>(14)</sup>を述べ、「我唯知此菩薩受生自在法門。」<sup>(15)</sup>と示す。

舞台の轉換、妙徳円満天の兜率陀天からの降神下生、十種の瑞相は、釋尊の誕生時の光景を想い起こさせるものがあり、次に善財の出会い善知識が釋迦族の女の瞿夷を登場させるための序幕であろう。

迦毘羅城に向かった善財は菩薩會の莊嚴講堂の離憂妙天の所に辿り着く。離憂妙天は「不久必當速得無上清淨莊嚴佛身口意。相好嚴身。十力智慧莊嚴其心。遊行十方教化衆生。我觀仁者。修行勇猛精進力故。必當得見三世諸佛。受諸如來一切法雲。修習菩薩禪定法門寂滅之法。入於甚深如來法門。何以故。詣善知識親近供養。正念思惟善知識教。無有退轉疲倦之心。除滅障礙。降伏諸魔。無能壞者。令一切衆生得歡喜故。」<sup>(17)</sup>と善財を褒め讃え、法堂に昇ろうとしている善財の頂に花を散じて俱に法堂に昇り、寶蓮華藏の師子の座におられる瞿夷に見える。瞿夷は善財の「我已先發阿耨多羅三藐三菩提心。而未知菩薩云何行生死中而無所染。覺了一切諸法實相。超出聲聞緣覺之地。住如來地。而不捨離菩薩所行。修菩薩行。不離佛地。超出世間。法身圓滿。應世受生。普現種種諸方便身。知法無性。示現一切衆生之身。解甚深法。以妙音聲。而爲說法知衆生空。而能不捨化諸世間。知一切佛不生不滅。而能供養心無退轉。知無業報。而行善業無有休息。」<sup>(18)</sup>との問いに「能

問諸菩薩摩訶薩所行之法。修習普賢諸行願者。能如是問。諦聽諦聽。善思念之。我當承佛神力爲汝解說。善男子。若有菩薩。成就十法。則能滿足因陀羅網普智光明菩薩之行。何等爲十。所謂依善知識。廣發無量諸弘誓願。修淨勝妙。正直希望。集一切智功德。聞佛出世歡喜無量。心常樂住三世佛所。隨順一切諸大菩薩。悉爲一切佛所護持。清淨大悲遠離生死。是爲十法。若有菩薩。成就此法。則能滿足因陀羅網普智光明菩薩之行。佛子。若諸菩薩。勇猛精進心無退轉。出世修習佛無盡法。值善知識故。佛子。菩薩有十法。值善知識。何等爲十。所謂不惜身命。不求世樂。知諸法相。而不捨離一切智願。觀察法界。離三有海。無所依住。深入一切菩薩諸願。普照一切諸佛世界。淨修菩薩圓滿智慧。是爲十法。值善知識。<sup>19)</sup>と応じて修行者が十法を成就すれば因陀羅網普智光明菩薩の行をもれなく達成するであろうし、修行者が勇猛で精進の決意が無退轉であれば、彼らは善知識に値うであろうし、修行者に十の心掛けがあれば、彼らは善知識に値うであろうとし、その義を明示するために

無諂於知識	智慧廣無量	專求佛菩提	利益諸衆生	恭敬善知識	其心如佛想	勇猛精進力	具因陀網行
解脫心增廣	其量均虛空	攝取於三世	佛刹及衆生	直心如虛空	遠離煩惱垢	出生佛功德	是爲身雲行
不思議智慧	積集功德海	清淨福業藏	不染於世間	一切諸佛所	聞法無厭足	智慧燈普照	是爲照世行
一念皆能詣	十方利海佛	聞法分別知	是爲隨順行	見佛眷屬海	究竟三昧海	滿足諸大願	是因陀網行
未來劫修行	諸佛所護念	普照諸世界	是爲法光行	大悲見衆生	智日出世間	法光除癡闇	是爲智日行
見諸趣衆生	廻流生死中	爲轉淨法輪	是爲普賢行	智慧身無量	隨應而示現	普於一切趣	度脫諸群生
發起大慈悲	普覆於一切	遍照諸群生	令得佛菩提 <sup>20)</sup>				

と偈で詠い、「我已成就分別觀察一切菩薩三昧海法門。」<sup>21)</sup>と断言する。本経は、次のようにも語る。往古の世、一切寶主王は端正勇健で怨敵を摧伏した。その王太子である増上功德王は顔貌殊妙であったが、ある日香牙山に物見遊山にでかけた。その途上で、善現と離垢妙徳という名の母娘と出会う。娘は顔容美麗で、言論聡辯で心に諂曲も無かった。娘を見初めた太子は母に結婚を申し込む。それを聞いた娘は、自殺すると答え、このことばを聞いた母は太子は転輪王の相を持っている。聖主には玉女寶が不可欠であり、申し出を受入れなさいと娘に翻意を促す。娘は夢の中で如来の姿を見た。夢から覚めて天にこの夢を話すと、天はお前が夢の中で出会った如来は勝日光佛である。世尊を

奉勤し奉りて正法を聴受したとの言葉を賜り、結婚を受諾しようと決意する。太子は清浄功德の身をもったあなたは見飽きることがない。もし誰が契りを交わした人がいるならこの結婚の申し出は撤回しよう。菩提心を発して永久に修行していくべきであると応じ、母は娘は蓮華から五体健美で生まれ、一切の技術と世間の言論の法を悉く繚練しているの、是非とも娶って欲しいと太子に伝える。太子は無上道を求めているので家にいる時は布施をし、家を出ては道を修めるつもりであるが、娘はその障礙にはなるまいな。ならば娘を妻に迎えようと娘は共に法を行じましょうと応じ、二人の結婚の儀式が執り行われ、太子は三昧海を会得し、玉女となった娘は不可壊寂靜の法門を会得し、香牙園の道場で、勝日光佛が、始めて正覚を得たと離垢妙徳から聞いたと父王に伝え、父王はこれを聞いて歡喜し、王位を太子に譲り、世尊に従って出家学道しようと眷属とともに出家する。こうして王は無量の衆生を饒益した。この過去譚での太子増上功德主は釈迦無尼佛であり、寶主は寶華佛であり、娘の母善現は我が母善目で、その娘離垢妙徳寶垢妙徳寶女は私自身であった。<sup>(22)</sup>私は佛の如来性起修多羅を聞きおわって、淨智眼を得、觀察菩薩三昧海の法門を会得していますが、「我唯知此法門。」と付言する。<sup>(23)</sup>

釈迦の妻の一人とされる瞿夷は、いろいろな經典に登場する人物である。才色兼備で、人格円満とされる彼女には、多数の娘の中で太子が特に彼女を選んで自分の身につけていた寶石の首飾りはずして与えると、彼女は「あなたの首飾りを頂こうとは思いません。むしろ私の徳によつて貴方（太子）を飾りたいと思います。」<sup>(26)</sup>という逸話があるとされる人物でもある。また、ある經典で第一妃とされ、ラーフラ（羅睺羅<sup>(27)</sup>）の母であるヤシヨーダラ（耶輸陀羅<sup>(28)</sup>）ではなく、彼女が登場するのは最初の妻であったからかも知れない。

善財はこうして十地の最高の段階である法雲地のさとりを得たのである。善財は瞿夷のもとを離れるに際して「我當云何見善知識。善知識者遠離世間。住無處住不著諸人。超出障礙趣無礙道。具淨法身善業化身。以明淨智觀諸世間。大願成滿。持佛法身。如意法身。非生滅身。非來去身。非虛實身。非聚散身。一切諸相來即一相身。離邊見身。無所著身。無窮盡身。滅衆虛妄如電光身。如幻夢身。如鏡像身。如淨日身。充滿一切諸方化身。於三世中無壞法身。非身之身。如是等身。一切世間所不能見。唯是普賢菩薩所見。彼善知識行無礙行。我當云何能見親近。知其相貌聞法受持。」<sup>(29)</sup>との念を抱く。この念を抱いている間に寶眼という城天は「善男子。應守護心城。……佛子。菩薩摩訶薩。若有如是無障礙心。以少方便。能見一切諸善知識。究竟成就一切種智。」<sup>(30)</sup>と善財を勵まし、虚空中の法妙徳という天は、摩耶夫人を讚嘆し、色光明網を放つて諸佛の世界を照らした。「爾時善財。見光明網。照諸佛身遶一匝已。然後還來入善財頂充滿其身。爾時善財。即得離垢淨

光明眼。除滅一切愚癡闇障。得離瞽眼。了知一切衆生實性。得離垢眼。觀一切法性。得淨慧眼。觀一切刹性。得淨光眼。見佛法身。得普明眼。觀不思議如來色身。得無礙光眼。觀察一切世界成敗。得遍光眼。見一切佛轉正法輪出生修多羅。得普境界眼。觀察無量諸佛神力教化衆生。得普見眼。觀一切世界隨因緣起諸佛興世<sup>(31)</sup>。という奇跡的な体験をする。虚空に居て法堂を守護する善眼という羅刹鬼王<sup>(32)</sup>は善財に次のように語る。「善男子。若有菩薩。成就十法。則能親近諸善知識。何等爲十。所謂直心清淨遠離詭曲。不壞大悲攝取衆生。觀察衆生非眞實性。於薩婆若心不退轉。於佛大衆得堅信力。以淨慧眼觀諸法性。無壞大悲普覆衆生。明淨慧光了諸法界。善對治法雨甘露雲。除生死苦順善知識。以明淨眼觀諸法性相續不斷。菩薩成就此十法者。則能親近諸善知識。復次佛子。菩薩成就十三昧門。則能親見諸善知識。何等爲十。所謂淨法虚空圓滿三昧。觀察一切方海三昧。分別一切境界三昧。對見十方諸佛三昧。長養功德藏海三昧。念念不捨善知識三昧。現前見一切如來功德善知識三昧。詣善知識三昧。常得不離一切善知識三昧。恭敬供養善知識無過失三昧。善男子。菩薩成就此十三昧門。則能親見諸善知識。又得諸善知識微妙音聲。轉正法輪三昧法門。若有菩薩。住此法門。悉知一切諸佛平等。常能親見諸善知識<sup>(33)</sup>。更に「敬禮十方求善知識。正念思惟一切境界求善知識。勇猛自在遍遊十方求善知識。知身知行。如夢如電。詣善知識<sup>(34)</sup>。と諭す。仰ぎ見れば蓮華台の上の樓觀の摩尼寶の師子座に摩耶夫人がおられた。端正殊妙で淨き色身を具えられておられた摩耶夫人に善財は「文殊師利菩薩。往昔教我發阿耨多羅三藐三菩提心。求善知識親近供養。我已漸求至大聖所。願爲演說。云何菩薩學菩薩行修菩薩道<sup>(35)</sup>。」と尋ね、摩耶夫人は「我已成就大願智幻法門。得此法門故。爲盧舍那如來母。於此閻浮提迦樓毘羅城淨飯王宮。從右脇生悉達太子。顯現不可思議自在神力。善男子。菩薩。於兜率天命終時。一一毛孔放大光明。名一切如來受生圓滿功德。顯現不可說不可說佛刹微塵等菩薩受生莊嚴。普照一切世界。照已來觸我頂。遍入我身一切毛孔。入已普見菩薩受生自在莊嚴。又見出家往詣道場成等正覺。菩薩天人大衆圍遶恭敬供養轉正法輪。彼諸如來。於過去世行菩薩行。於諸佛所恭敬供養。發菩提心。淨諸佛刹。無量化身充滿法界。教化衆生。乃至示現大般涅槃。如是等事皆悉親見。又善男子。彼妙光明來入我身。我身爾時。超出世間與虚空等。亦不過人。悉能容受十方菩薩莊嚴宮殿。爾時菩薩。從兜率天降神下時。與十佛刹微塵等菩薩俱。皆悉同行。大願善根莊嚴法門。智慧自在一切諸地。清淨法身無量色身。究竟普賢諸大願行。皆悉同等。如是菩薩眷屬圍遶。又與八萬諸龍王俱。娑伽羅龍王等及諸夜叉八部神等恭敬供養。降神下時。放大光明普照世界。現自在力。除滅一切諸惡道苦。以巧方便。教化不可思議衆生。皆悉令知宿世業行。令諸菩薩修不放逸無所染著。救護衆生令悉親見此菩薩身。現如是等諸奇特事。與大衆俱來處我胎。彼諸菩薩。於我胎內遊行自在。

或以三千大千世界。以爲一步。或不可說不可說佛刹微塵等世界。以爲一步。又念念中。十方一切世界。一切佛所。不可說不可說菩薩眷屬。及四天王忉利天王乃至梵王。如是等一切天王皆入我胎。欲見菩薩恭敬供養聽受正法。悉皆容受如是等衆。而胎不廣大。亦不迫迮。於此世界。示現如是神變受生。十方一切閻浮提中亦復如是。亦不分身。種種現化隨其所應爲菩薩母。……如是等賢劫一切佛。於此世界成等正覺。我悉爲母。亦於十方一切世界教化衆生。」<sup>(36)</sup>と私は大願智幻法門を成就したので盧舍那如來の母となり、淨飯王の宮殿で右脇より悉達太子を生み、不思議自在神力を現したし、菩薩が、兜率天でその命を終える時には一つ一つの毛孔から大光明を放ち、一切世界を普く照らし、照らし終えて私の頭のところに来ると、私の身体の中に入り、その時に私は菩薩の受生自在の莊嚴を見たし、出家した菩薩が道場に詣り、等正覺を成じ、正法輪を轉じることを見たし、またその時にそれらの菩薩は天から降りてこられて我が胎内に入り自在に遊歩するようになったし、私は盧舍那をはじめすべての佛の母となったと教示し、善財のこの法門を會得されてからどれ位に経ちますかの問いに、

佛子乃往古世。過不可思議非諸菩薩通明境界不可數劫。有劫名淨光明。有世界。名曰妙德須彌山王。其土清淨無諸垢穢。衆寶合成種種嚴飾。見者無厭。彼世界中。有千億四天下。諸四天下中。有一四天下中。彼四天下中。有八十億大王之都。彼王都中。有一王都名曰智幢。有轉輪王名曰勇盛。彼王都北。有一道場名月光明。其道場神名慈妙德。時有菩薩名離垢幢。坐於道場臨成正覺。時有惡魔名金剛光明。與眷屬俱至菩薩所。壞其道行。時勇盛王。具足菩薩神力自在。化作兵衆。多彼魔軍而摧伏之。時彼菩薩得成正覺。時道場神見此事已。歡喜無量發如是願。此轉輪王乃至成佛。我爲其母。善男子。我曾於彼道場。供養十那由他佛。善男子。彼道場神。豈異人乎。我身是也。轉輪王者。盧舍那佛是也。善男子。我從爾時發願已來。盧舍那佛。於一切有。行菩薩行教化衆生。乃至最後受生。我常爲母。復次善男子。現在過去十方無量無邊諸佛。放大光明。來照我身宮殿住處者。彼最後生。我悉爲母。善男子。我唯知此大願智幻法門。諸大菩薩具大悲藏。教化衆生心無厭足。得自在法。一一毛孔。現一切佛自在神力。我當云何能知能說彼功德行。<sup>(37)</sup>

とはるか昔、妙德須彌山王という世界があり、その国土は清淨で垢穢がなく、衆の寶により種々に嚴飾され、見る者を厭きさせなかった。その世界の中に智幢という名の王都があり、勇盛という轉輪王がおり、王都の北には月光明という道場があり、その道場神は慈妙徳という名であった。離垢幢という名の菩薩が道場に坐し、正覺を成じようとする時に、金剛光明という名の惡魔が郎党を引き連れて菩薩の所にやつて来てその成道を妨害しようとした。勇盛は惡魔どもを摧伏した。その時にかの菩薩は正覺を成じ、道場神はこのいきさつを見ており、

歡喜して『この轉輪王が成佛するまで、私はその母となろう』との願を發した。善男子よ、その道場神がほかならぬ私であり、轉輪王は盧舍那佛であられる。善男子よ、發願以来、盧舍那佛は、一切有に於て菩薩の行を實踐して、衆生を教化し最後の受生に至るまで、常に私は母であった。また、諸佛が大光明を放つて、やってこられて我が身と宮殿と住処とを照らされたので、彼の生涯、母となっていた。私は唯この大願智幻法門を知っているにすぎない。……と答えた。

釋迦の生母である摩耶夫人は、『今昔物語』にもその卷二に「釋迦如來人界宿給の夢」の逸話が収録されているのをはじめ、再三ならずそのエピソードが取り上げられているし、神戸市には空海の持ち帰った、梁の武帝自作摩耶夫人像を奉安することに因む佛母摩耶山切利天<sup>(39)</sup>上寺がある。高齡出産と産褥熱で悉達太子出産の一週間後には再び切利天の人となった彼女を、その妹であり育ての母であり、尼僧第一号となつた摩訶波闍提ではなく、生母の、逆に言えば悉達太子にとって何等の記憶もない母を取り上げていることは、興味深いが、この経典はさらに敷衍して諸佛の母とさえ位置づけてもいるのである。

因みに『新約聖書』におけるイエス誕生譚は

イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリア、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯れたり。夫ヨセフは正しき人にして、之を公然にするを好まず、私に離縁せんと思ふ。かくて、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリアを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。かれ子を生まん。汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の云ひ給ひし言の成就せん為なり。曰く

『視よ、處女みごもりて子を生まん。

その名はインマヌエルと稱へられん』

之を釋けば、神われらと偕に在りという意なり。ヨセフ寐より起き、主の命ぜし如くして妻を納れたり。されど子の生るるまでは、相知る事なかりき。かくてその子をイエスと名づけたり。<sup>(40)</sup>

と處女懐胎という超自然的な懐胎を示している。

これとは対照的に摩耶夫人の懐妊と出産は淨飯王との間の子であり月満ちて誕生したとされるが、懐妊も出産も夫人の右脇から行なわれたという奇異なものであるし、懐妊の自覚が六本の牙を持つ白い象が胎内に宿った夢をみたことであり、<sup>(41)</sup>出産はルンビニの園で無憂華樹の花を手折ろうとしたときに夫人の右脇から釈迦が誕生したとされている。

奇抜な出生譚は、宗教上の指導者にはつきものであるが、閑話休題、善財の修道のための善知識の探訪を考察していく。摩耶夫人に別れを告げた彼は更なる求道のために夫人の勧めた正念王の童女の天主光に天宮において見える。童女は善財の求めに応じて「我得菩薩解脱。名無礙念清淨莊嚴。善男子。我念過去。有最勝劫。名青蓮華。我於彼劫中。供養恒河沙等諸佛如來。彼諸如來。從初出家。我皆瞻奉守護供養。造僧伽藍營辦什物。又彼諸佛。從爲菩薩住母胎時。誕生之時。行七步時。大師子吼時。住童子位在宮中時。向菩提樹成正覺時。轉正法輪現佛神變教化調伏衆生之時。如是一切諸所作事。從初發心乃至法盡。我皆明憶無有遺餘。常現在前念持不忘。……從彼一切諸如來所。聞此無礙念清淨莊嚴菩薩解脱。受持修行恒不間斷隨順趣入。如是光劫所有如來。從初菩薩乃至法盡。一切神變。我以淨嚴解脱之力。皆隨憶念明了現前。持而順行曾無懈廢。善男子。我唯知此無礙念清淨解脱。如諸菩薩摩訶薩。出生死夜朗然明徹。永離癡冥未嘗昏寐。心無諸蓋身行輕安。於諸法性清淨覺了。成就十力開悟群生。而我云何能知能說彼功德行。善男子。迦毘羅城有童子師。名曰遍友。汝詣彼問。云何菩薩學菩薩行。修菩薩道。」と無礙念清淨莊嚴という解脱を得ていることを告白し、幾劫という時間を諸佛如來を供養し念持してきたが唯この解脱を知っているに過ぎない。他の諸の菩薩のように「出生死夜朗然明徹。永離癡冥未嘗昏寐。心無諸蓋身行輕安。於諸法性清淨覺了。成就十力開悟群生。而我云何能知能說彼功德行。」とはできないとして迦毘羅城の遍友という童子師を訪ねるよう勧める。この勧告に従って再び天宮より下降し迦毘羅城に向い、童子師に尋ねるが、彼は「此有童子。名善知衆藝。學菩薩字智。汝可問之。當為汝說。」と答えるのみであり、その言葉に従って善知衆藝童子に教えを受けるために赴く。童子は「我得菩薩解脱名善知衆藝。我恒唱持入此解脱根本之字。唱阿字時。入般若波羅蜜門。名菩薩威德各別境界。唱羅字時。入般若波羅蜜門。名平等一味最上無邊。……唱陀字時。入般若波羅蜜門。名一切法輪出生之藏。善男子。我唱如是入諸解脱根本字時。此四十二般若波羅蜜門爲首。入無量無數般若波羅蜜門。善男子。我唯知此善知衆藝菩薩解脱。如諸菩薩摩訶薩能。於一切世出世間善巧之法。以智通達到於彼岸。殊方異藝成綜無遺。文字算數蘊其深解。醫藥呪術善位衆病。有諸衆生。鬼魅所持怨畜呪詛。惡星變怪死屍奔逐。癩癩羸瘦種種疾。威能救之使得痊愈。又善別知金玉珠貝珊瑚瑠璃摩尼砗磲雞薩羅等。一切

寶藏出生之處。品類不同價直多少。村營鄉邑大小都城。宮殿苑園巖泉數澤。凡是一切人衆所居。菩薩咸能隨方攝護。又善觀察天文地理。人相吉凶鳥獸音聲。雲霞氣候。年穀豐儉國土安危。如是世間所有技藝。莫不該練盡其原本。又能分別出世之法。正名辯義觀察體相。隨順修行智入其中。無疑無礙。無愚闇。無頑鈍。無憂惱。無沈沒。無不現證。而我云何能知能說彼功德行<sup>(44)</sup>。」と応じて、善知衆藝という名の解脱を得ており、梵語の四十二字を唱えて般若波羅蜜門に入るのを首として無量無数の般若波羅蜜門に入ることが出来るが唯これだけの菩薩の解脱を知っているだけであり、他の諸菩薩のように、智そのものの中に入り、疑うことなく、礙げなく、愚闇なく、頑鈍なく、憂惱なく、沈没することなく、衆生を救済することはできないので、賢勝と号する優婆夷を訪ねるよう勧めめる。賢勝は善財の求めに応じて「我得菩薩法門。名無依處道場。既自開解復爲人說。又得無盡三昧。非彼三昧法有盡無盡。以能出生一切智性眼無盡故。又能出生一切智性耳無盡故。又能出生一切智性鼻無盡故。又能出生一切智性舌無盡故。又能出生一切智性身無盡故。又能出生一切智性意無盡故。又能出生一切智性種種慧明無盡故。又能出生一切智性周遍神通無盡故。又能出生一切智性如海波濤無量功德皆無盡故。又能出生一切智性遍世間光無盡故。善男子。我唯知此無依處道場法門。如諸菩薩摩訶薩一切無著功德行。而我云何盡能知說<sup>(45)</sup>。」と答え、無依處道場という菩薩の法門を得ており、自ら真理を了解し他者のために説法しており、無尽三昧を得ており、一切智性の眼・耳・鼻・舌・意等を生み出すことができるが、唯この無依處道場の法門を知っているだけであるとして菩薩の一切無著の功德の行のごときは沃田という都城の堅固解脱長者を訪ねて聞くよう勧めめる。堅固解脱長者は善財の求めに「我得菩薩解脱。名無著清淨念。我自得是解脱已來。法願充滿。於十方佛所無復希求。善男子。我唯知此淨念解脱。如諸菩薩摩訶薩。護無所畏大師子吼。安住高廣福慧之聚。而我云何能知能說彼功德行。善男子。即此城中有一長者。名爲妙月。其長者宅常有光明。汝詣彼問。云何菩薩學菩薩行修菩薩道<sup>(46)</sup>。」と無著淨念という名の菩薩の解脱を得ており、法願充滿して、復た希求することがないが、この淨念解脱を知るのみで、諸の菩薩摩訶薩の功德の行の如きは、私は説くことが出来ないとして妙月長者を訪ねるよう勧め告する。妙月の言は「我得菩薩解脱。名淨智光明。善男子。我唯知此智光解脱。如諸菩薩摩訶薩。證得無量解脱法門。而我云何能知能說彼功德行<sup>(47)</sup>。」というものであり、それ以上のことは無勝軍長者に聞けであった。善財の問いに対して無勝軍長者は「我得菩薩解脱。名無盡相。我以證此菩薩解脱。見無量佛得無盡藏。善男子。我唯知此無盡相解脱。如諸菩薩摩訶薩。得無限智無礙辯才。而我云何能知能說彼功德行<sup>(48)</sup>。」と無盡相という菩薩の解脱を知っているのみであると答え、尸毘最勝という婆羅門を訪ねて問えと勧めめる。婆羅門は「我得菩薩法門。名誠

願語。過去現在未來菩薩。以是語故。乃至於阿耨多羅三藐三菩提無有退轉。無已退無現退無當退。善男子。我以住於誠願語故。隨意所作莫不成滿。善男子。我唯知此誠語法門。如諸菩薩摩訶薩。與誠願語行止無違。言必以誠未曾虛妄。無量功德因之出生。而我云何能知能說。<sup>(49)</sup>」

と誠願語という菩薩の法門を得てはいるがそれだけであると答え、妙意華門城の徳生童子と有徳童女を訪ねて問うことを勧める。二人は善財に「我等證得菩薩解脫。名爲幻住。以斯淨智。觀諸世間皆幻住。因縁生故。一切衆生皆幻住。業煩惱所起故。一切法皆幻住。無明有愛等展轉縁生故。一切三界皆幻住。顛倒智所生故。一切衆生滅生老死憂悲苦惱皆幻住。虛妄分別所生故。一切國土皆幻住。想倒心倒見倒無明所現故。一切聲聞辟支佛皆幻住。智斷分別所成故。一切菩薩皆幻住。能自調伏教化衆生殊勝智心及諸行所願之所成故。一切菩薩衆會變化調伏諸所施爲皆幻住。願及智所攝成故。善男子。幻境自性不可思議。善男子。我等二人但能知此菩薩解脫。如諸菩薩摩訶薩。善入無邊諸事幻網。彼功德行我等云何能知能說。<sup>(50)</sup>」と二人は幻住という解脫を證得しており世間が幻住であり、衆生が幻住であり、法が幻住であり、……と諸行無常の理法を言明した。天主光童女以下の善知識は解脫に關しての教えを示しており、徳性童子・有徳童女の二人は諸行無常を基軸とする幻住の解脫を証したのであり、更に二人は「於此南方有一國土。名曰海澗。彼有園林。名大莊嚴藏。於彼林中有大樓觀。名嚴淨藏。菩薩往昔善根所起。菩薩諸願自在諸通智力。巧妙方便功德大悲。法門所起。彼園中有菩薩摩訶薩。名曰彌勒。常化父母親戚眷屬及同行者。又復長養其餘無量衆生善根。令住大乘。亦欲爲汝顯現菩薩方便法門。欲明菩薩受生自在。欲對現教化一切衆生令厭諸有。宣明菩薩大慈悲力。覺悟菩薩無相法門。明諸有趣悉無自相。汝詣彼問。云何菩薩淨菩薩道。云何菩薩學菩薩戒。云何菩薩淨菩薩心。云何菩薩發諸大願。云何菩薩積功德具。云何菩薩得菩薩地。云何菩薩滿足一切諸波羅蜜。云何菩薩得諸忍法。云何菩薩住功德行。云何菩薩近善知識。何以故。彼菩薩摩訶薩。究竟一切諸菩薩行。分別了知衆生心行。以巧便智而教化之。滿足一切諸波羅蜜。住菩薩地得諸忍門。證於菩薩離生之法。於諸佛所而得授記。於菩薩法自在遊戲。持諸佛持。無量諸佛以一切智甘露正法而灌其頂。善男子。彼菩薩摩訶薩。能示導汝眞善知識。堅菩提心長養善根。住正直心現菩薩根。說無礙法平等諸地。讚歎菩薩所出生道。具諸菩薩願行功德。能廣演說普賢所行。善男子。汝不應於一善根中生知足想。一光明法。一行一願。一授記別。得法忍門。六波羅蜜。菩薩諸地所淨佛刹。近善知識。於是事中生知足想。……略說菩薩教化一切衆生。於一切劫行菩薩行。於一切趣應現受生。以明淨智了一切三世。淨一切刹滿一切願。供養一切佛。與一切菩薩同修願行。親近一切諸善知識。是故善男子。應一向求諸善知識。若見聞法恭敬供養。於善知識。勿生嫌疑身心懈厭。令一切善知識心大歡悅。……善知識者。能令除滅

諸障礙故。遠不善法離惡知識。滅無明闇諸邪見縛。超出生死一切世間。斷魔鉤餌拔苦惱刺。出無智險難邪惑山澗。越度有流諸惡邪徑。示導清淨菩提正道。教菩薩法。修習四道。明淨慧眼。安立薩婆若。增長菩提心。廣大慈悲。修波羅蜜。住菩薩地。得深法忍。淨一切善根。積集一切菩薩功德。施與一切菩薩功德。見一切佛心大歡喜。護持淨戒解真實義。出正法門離諸邪道。現明法門普照一切。聞持無量諸佛法雲。滅一切煩惱。增益一切智。住一切佛法。復次善男子。善知識者則為慈母。生佛家故。善知識者則為慈父。以無量事益衆生故。善知識者則為養育守護。不為一切惡故。善知識者則為大師。教化令學菩薩戒故。善知識者則為導師。教化令至彼岸道故。善知識者則為良醫。療治一切煩惱患故。善知識者則為雪山。長養明淨智慧藥故。善知識者則為勇將。防護一切諸恐怖故。善知識者則為牢船。悉令越度生死海故。善知識者則為船師。令至一切智法寶洲故。是故。善男子。應當如是正念思惟善知識。又善男子。詣善知識。發大地心。持一切事無疲倦故。發金剛心。堅固正直不可壞故。發金剛山心。一切苦患不能壞故。發無自心。隨彼意故。發弟子心。不違一切教故。發僮僕心。一切苦役不疲厭故。發養育心。不畏煩惱所污染故。發備作心。隨所受教不違逆故。發卑下心。遠離自大增上慢故。發成熟心。善知時非時故。發寶馬心。離隴悵心。不調故。發大車心。載一切故。發大象心。伏諸根故。發大山心。一切惡風不能動故。發小犬心。離瞋恚故。發栴陀羅心。離憍慢故。發折角心。離威勢故。發大風心。無所著故。發大船心。於彼此岸往返不疲故。發橋梁心。度善知識教故。發孝子心。見善知識無厭足故。發王子心。順君教故。又善男子。應於自身生病苦想。於善知識生醫王想。於所說教生良藥想。又於自身生遠行想。於善知識生導師想。於所說教生正路想。又於自身生趣彼岸想。於善知識生知濟想。於所說法生涼池想。又於自身生農夫想。於善知識生龍王想。於所說法生時澤想。於隨說行生成熟想。又於自身生貧窮想。於善知識生毘沙門寶天王想。於所說教生珍寶想。又於自身生弟子想。於善知識生大師想。於所說法生修學想。又於自身生怯劣想。於善知識生勇健想。於所說法生器仗想。又於自身生商人想。於善知識生導師想。於所說法生珍寶想。隨聞說行生勝寶想。又於自身生子息想。於善知識生慈父想。於所說法生立家想。又於自身生王子想。於善知識生大臣想。於所說法學王教想。善男子。詣善知識。應正思念發如是想。何以故。因淨直心見善知識。隨順其教增長善根。如依雪山出衆藥草。為佛法器如海吞流。生諸勝德如海出寶。淨菩提心如鍊真金。超出世間如海須彌。不染世間如水蓮華。不沒諸惡如海死屍。長白淨法如月盛滿。普照法界如日迴耀。長菩薩身如母養子。善男子。略說菩薩摩訶薩若能隨順善知識教。得十不可說百千億那由他諸功德。明十不可說百千億那由他淨直深心。增長十不可說百千億那由他菩薩諸根。淨十不可說百千億那由他菩薩諸持。滅十不可說百千億那由他諸障礙法。超十不可說百千億那由他諸惡魔業。入十不可說百千億那由他善

薩法門。滿十不可説百千億那由他諸妙功德。修十不可説百千億那由他菩薩所行。具十不可説百千億那由他菩薩大願。善男子。略説菩薩因善知識究竟一切菩薩行。一切菩薩波羅蜜。一切菩薩地。一切菩薩忍。一切菩薩陀羅尼。一切菩薩三昧門。一切菩薩通明智自在。一切菩薩迴向。一切菩薩大願。善男子。如是等一切法。善知識爲本。依善知識起。依善知識生。依善知識取。依善知識發。依善知識長。依善知識住。依善知識得。<sup>(51)</sup>と示し、海澗の大莊嚴藏という園林の中の嚴淨藏という大樓閣（そこは菩薩が往昔發願され大悲の法門をひらかれた地であるが）に住んでおられる彌勒菩薩<sup>(52)</sup>は、父母・親戚・眷屬・および同行の者を教化され、衆生の善根を育て、大乘に帰依させておられ、またあなたのために菩薩の受生自在を明示されようとし、衆生には諸悪を厭わせようとなさり、菩薩の大悲力を宣明され、菩薩の無相の法門を覺られ、諸悪は本性を持たないことを明らかにされようとしておられるが、「究竟一切諸菩薩行。分別了知衆生心行。以巧便智而教化之。満足一切諸波羅蜜。住菩薩地得諸忍門。證於菩薩離生之法。於諸佛所而得授記。於菩薩法自在遊戲。持諸佛持。無量諸佛以一切智甘露正法而灌頂。」であるので、「能示導汝眞善知識。堅菩提心長養善根。住無礙法平等地。讚歎菩薩所出生道。具諸菩薩願行功德。能廣演説普賢所行。」のはずであり、彼の彌勒菩薩に「云何菩薩淨菩薩道。云何菩薩學菩薩戒。云何菩薩淨菩薩心。云何菩薩發諸大願。云何菩薩積功德具。云何菩薩得菩薩地。云何菩薩満足一切諸波羅蜜。云何菩薩得諸忍法。云何菩薩住功德行。云何菩薩近善知識。」を尋ねなさいと要求し、「汝不應於一善根中生知足想。一光明法。一行一願。一授記別。得法忍門。六波羅蜜。菩薩諸地所淨佛刹。近善知識。於是事中生知足想。」と念を押し、た上で、簡潔に説明すれば菩薩は一切の衆生を教化し一切劫に於いて菩薩の行を行じ一切趣に於いて應現受生し、明淨の智を以て一切の三世を了り、一切利を淨め、一切の願を満じ、一切の佛を供養し、一切の菩薩と同じく願行を修して、一切諸の善知識に親近すべきなのです。だから善男子よ、應に一向に諸の善知識を求むべきです。若し法を見聞したなら恭敬し供養し、善知識に疑いをもち、身心懈厭することのないようになさい。一切の善知識を心から感悦させなさい。善知識は能く障礙を除滅させるからです。不善の法を遠ざけ、悪知識を離れ、無明の闇と、諸の邪見の縛とを滅し、生死一切の世間を超出し、魔の鉤餌を断ち、苦惱の刺を抜き、無智の險難と邪惑の山澗とから出させ、有流の悪邪の徑を乗り越え、清淨なる菩提の正道を示導し、菩薩の法を教え、四道を修習し、慧眼を明淨にし、薩婆若を安立し、菩提心を増長し、廣大なる慈悲をもって波羅蜜を修し、菩薩地に住し、深き法忍を得、一切の善根を淨め、一切の菩薩の功德を積集し、一切の菩薩の功德を施與し、一切の佛を見たてまつりて心大いに歡喜し、淨戒を護持し、眞實の義を解し、正法門を出だして邪道を離れ、明法門を現

じて、普く一切を照らして無量の諸佛の法雲を聞持し、一切の煩惱を滅し、一切智を増益し、一切の佛法に住せしむればなりとした上で、「善知識者則爲慈母。生佛家故。善知識者則爲慈父。以無量事益衆生故。善知識者則爲養育守護。不爲一切惡故。善知識者則爲大師。教化令學菩薩戒故。善知識者則爲導師。教化令至彼岸道故。善知識者則爲良醫。療治一切煩惱患故。善知識者則爲雪山。長養明淨智慧藥故。善知識者則爲勇將。防護一切諸恐怖故。善知識者則爲牢船。悉令至度生死海故。善知識者則爲船師。令至一切智法寶洲故。」と善知識が佛道を奉ずる一員として導くがために慈母であり、無量の事で衆生を益するので慈父であり、一切の悪を為さないようにするので養育守護者であり、教化し菩薩の戒を学ばせるので大師であり、教化して彼岸の道へと至らせるので導師であり、一切の煩惱の患を療治するので良医であり、明淨智慧の薬を育てているので雪山であり、一切の恐怖から防護するので勇將であり、悉く生死の海を越度させるので牢船であり、一切智の法宝の洲に至らせるので船師であると、善知識の慈母、慈父、養育者、大師、導師、良醫、雪山、勇將、牢船、船師として捉え得る事を示した上で、「應當如是正念思惟詣善知識」とし、善知識に詣でることで、どんな事態に置かれようとも疲倦しない大地の心を起こし、求道の堅固な姿勢である金剛の心を持つ……などのさまざまな心情を持つようになるとし、さらに「菩薩因善知識究竟一切菩薩行。一切菩薩波羅蜜。一切菩薩地。一切菩薩忍。一切菩薩陀羅尼。一切菩薩三昧門。一切菩薩通明智自在。一切菩薩廻向。一切菩薩大願。善男子。如是等一切法。善知識爲本。依善知識起。依善知識生。依善知識取。依善知識發。依善知識長。依善知識住。依善知識得。」と総括するのである。

この一節に多数の善知識を訪問し、悟りのための修行を続けようとする善財を描こうとする「入法界品」の教育上の意味が託されているように思われる。この教えを聞いた善財は歓喜のあまり躍り上がって彌勒菩薩の坐します樓閣に向かう。

註

(1) 流彌尼園 嵐毘尼・藍毘尼園とも表記 ルンビニー (Lumbini) はネパール南部のタライイ地方にある。シュッドーダナ王(浄飯王)の妃マヤー(摩耶夫人)は、この地のサラ樹の下でブツダを出生したと伝えられる。一八九六年、アショーク王(阿育王)建立の石柱が発見され、刻文によって、ブツダ誕生の地であることが確認された。中国僧の法顕や玄奘もこの地を訪れ、ブツダゆかりの遺跡を巡拝した記録を残している。(中村元著『岩波佛教辞典』第二版による) ルンビニの名は摩耶夫人の父の善覺長者が迦毘羅城と提婆陀訶城の間に、当時釈迦族が果樹園を設け

てそこで物見遊山をしたことに倣って園林をつくり、妻の嵐毘尼に因んで「嵐毘尼園」と名づけたと『佛本行集経』は伝えている。(大正新脩大藏經 卷 三 六八六頁 上段 以下大正新脩大藏經からの引用は 三三六八六：上と略記)

(2) 林天 妙徳圓満天は底本とした「六十華嚴」においても「漸漸遊行至彼林中。周遍推求妙徳圓満林天。」とあり、「八十華嚴」では明示的ではないが「此閻浮提。有一園林名嵐毘尼。彼園有神名妙徳圓満。」と園神として位置づけているし、「四十華嚴」でも「詣嵐毘尼林。到已右邊周旋。求覓妙徳圓満愛敬林天。」とあり、梵文の「入法界品」でも「ここジャンプ州にルンビニー(嵐毘尼林)があり、そこにステーションマンダラ・ラティシユリー(すばらしい威光の輪の栄光、妙徳圓満愛敬)という名のルンビニーの森の女神が住んでいます」とされている。前稿で考察したように摩竭提城の安住道場地神を訪問した後、迦毘羅婆城の娑婆婆陀夜神、閻浮提摩竭提城の甚深妙徳離垢光明夜神、その近くで喜目觀察衆生夜神に、喜目觀察衆生夜神を取り巻く佛衆の中の妙徳救護衆生夜神を、その近くで寂靜音夜天、寂靜音夜天の道場の如来衆の妙徳守護諸城夜天、道場の佛衆の中の開敷樹華諸城夜天、その道場の中の願勇光明守護夜天、という夜神、夜天に代わって林天・園神と変化させている。(A：九：七五—：上 B 十：四〇—：下 C 十：七七八：上 D 下159頁 但しAは『大方廣佛華嚴經』(六十卷 晋譯) Bは『大方廣佛華嚴經』(八十卷 唐譯) Cは『大方廣佛華嚴經』(四十卷 貞元譯) 及びDは梵文の『大方廣佛華嚴經』の「入法界品」の邦語譯の「さとりにへの遍歴」を指す。) また「天」はサンスクリット語 *deva* の訳で、神を意味する。神の概念は仏教の救済論には本来必要であるが、バラモン(婆羅門)文化の影響下に仏教にとりいれられた。バラモン教(婆羅門教)においては、「リグ・ヴェーダ」以来、三十三神、あるいは三千三百三十九神ともいわれる多数の神が信仰されたが、その多くは自然現象が神格化されたものである。*deva* (本来、輝くもの、の意) は、ギリシア語の *theos* やラテン語の *deus* と語源を同じくし、したがってバラモン教の神の概念はギリシア神話やローマ神話のそれと共通するところがある。

仏教「受容と展開」バラモン教の神が仏教にとりいれられる経過のなかに二つの時代的ピークが認められる。一つは、仏教が誕生したときで、このときすでにバラモン教において流行していた梵天・帝釈天・龍・夜叉(後二者は民間信仰的色彩が強い)などがとりいれられた。もう一つは密教が誕生したところで、ヒンドゥー教(バラモン教が民衆化したもの)で神々が仏教に入って摩醯首羅天(ヒンドゥー教のシヴァ神)や那羅延天(ヒンドゥー教のヴィシュヌ神)、大黒天、荼吉尼天などだった。これらは仏あるいは仏法を守護する神となったが、その典型的な例がガンダーラの浮彫りに示される。金剛を手に仏に従う金剛手(インドラ神に由来する)である。なお、上記の二時期のあいだには大乘仏教誕生の一期期があり、このときヒンドゥー教の神やイラン系の神が菩薩としてとりいれられた。観世音菩薩・弥勒菩薩など。

仏教ではこれらの神々は比較的低級な存在とされ、かれらの上に、仏教独自の天として、宗教的理想の境地を象徴するものがおかれた。以下、仏教における古典的な(すなわち比較的初期の)天界を説明しよう。まず「天」は神を意味すると同時に、神が住む場所(天界 *Svarga*)をも意味する。天を五趣(五悪趣)あるいは六道の一つとするときには、後者の意味あいが強いの。天は五趣あるいは六道のうちの最高所を占めるが、それ自身のうちにさらに細かい段階が設けられている。『俱舍論』によると、天に次の二十七種がある(下位のものから挙げる)。四大王衆天・三十三天・夜摩天・觀史多天・樂變化天・他化自在天(以上は六欲天)、梵衆天・梵輔天・大梵天・少光天・無量光天・極光淨天・少淨天・無量淨天・遍淨天・無雲天・福生天・広果天・無煩天・無熱天・普現天・善見天・色究竟天(以上は色界の十七天、ちなみに広果天と無煩天の間に無想天を入れて十八天とする経典もある)、空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処(以上は無色界の四天)。

〔六欲天・色界十七天・無色界四天〕 上記の諸天に簡単な説明を加えよう。六欲天は神でありながら、いまだに欲望にとらわれている。ただし、人間よりはとらわれの程度が低い。(四大王衆天) は四天王およびその配下のことで、須弥山の中腹の四面に持国天(東)・增長天(南)・広目天(西)・多聞天(毘沙門天)(北)が住み、その下方に配下の葉叉(夜叉)達が住む。(三十三天)は Trivastimsa の意訳で、音写すれば切利天である。これは三十三種の神を意味し、帝釈天を首長とし、須弥山上に住む。(リグ・ヴェーダ)以来の神々がここにあてはめられているのである。(ここまでの神は地上に住むので地居天といい、その上に空居天がつづく。(夜摩天)は焰摩天・炎摩天とも綴られ、空居天の最初である。(觀史多天)は(兜率天)とも綴られ、下界に降りるまえの仏の滞在処として知られている。(樂變化天)は神通力によってみずからの欲望の境地を造りだして楽しむ。(他化自在天)は(第六天)とも綴られ、他人に欲望の境地を造りださせてそれを楽しむ。(最後の二天は欲望に関し、それなりの自由を得ている。)

色界の十七天は、静慮(禪定)の深まりに応じて四段階に分類される。最初の三天は、初静慮に、つぎの三天は第二静慮に、つぎの三天は第三静慮に、残りの八天は第四静慮に配される。このうち(色究竟天)は音写すれば(阿迦膩吒天)であり、色界中の究極の天を意味する。

無色界の四天は、三昧(禪定)の深まりに応じて配列されている。(空無辺処)は空無辺処定(無限の虚空を見る三昧)を修得したものが住む世界である。(識無辺処)〈無所有処〉(非想非非想処)〈非想非非想天〉は、それぞれ「内なる心識の無限を觀する三昧」「いかなるものも存在しないとみる三昧」「想念を持たず、また持たないでもない三昧」という三昧を修得したものが住む世界である。

以上の世界は上位のものほど高い位置にあつて広く、そこに住むものは身体が大きく寿命が長いが、三界のうち無色界だけは、物質(色)を超越しているので、世界や身体に大きさはなく、寿命だけがある。(中村元著『岩波仏教辞典』)

(3) A 九：七五一：上 B 十：四〇一：下 十：四〇二：上 C 十：七七八：上 中 D 下 160 161

(4) 一切智 ①すべてを知っている人、仏のこと。完全な智慧を有する者。全知者。②仏の智慧。一切を知る智慧。③すべてを知ること。④一切は空であると知る智。⑤三智(一切智と道種智と一切智智。それぞれ声聞、緣覚と菩薩とに対応する)の一つ。内外の一切のものに通達した智慧をいう。天台では二乗所得の智であるといい、俱舎では仏智であるとする。(中村元著『佛敎語大辞典』)また渡辺 宝陽は三智を①一切智、②道種智、③一切種智とし、①の一切智は、一切の事象を総体相としてとらえ、それらが等しく空であり、一相であると知る智慧(声聞・緣覚の智)、②の道種智は、種々の衆生を教化・救済するために、真理を種々の差別相に即して知り尽くす智慧(菩薩の智衛)、③一切種智、一切の事象・真理を総体相に即しつつ、個別相においてすべて知り尽くす智慧(仏の智慧)としている。渡辺 宝陽『ブツダ 永遠のいのちを説く』五十五頁また『岩波仏教辞典』では三智の項目で「大品般若經三慧品などに説く、一切智・道種智・一切種智の三種の智慧。このうち(一切智)は、一切の事象の総体相としてとらえ、それらが等しく空であり一相であると知る智慧で、声聞・辟支仏(緣覚)の智。(道種智)は、種々の衆生を教化・救済するために、真理を種々の差別相に即して知り尽くす智慧で、菩薩の智。(一切種智)は、一切の事象・真理を総体相に即しつつ、個別相においてすべて知り尽くす智慧で、仏の智とされる。なお天台宗では、この(三智)を菩薩瓔珞本業經賢聖學觀品に基づく空觀・假觀・中道觀の(三觀)に配し、三觀を因、三智を果と位置づけ、さらに別教では三智はそれぞれ順次に得られるが、円教では三智が前後の区別なく仏の一心に備わると説く。(中村元著『岩波仏教辞典』)

- (5) 薩婆若 [Sabbahitū] [sarva-jñā] の音写。一切智と漢訳する。すべてを知る人。一切智者。全智者。仏のこと(中村元著『佛教語大辞典』)
- (6) A 九…七五二…上 B 十…四〇二…上 C 十…七七八…中 D 下 162 163
- (7) A 九…七五二…上 B 十…四〇三…上 C 十…七七九…下 D 下 169 170
- (8) A 九…七五二…中 B 十…四〇三…上 C 十…七七九…下 D 下 170 171
- (9) A 九…七五二…中 B 十…四〇三…上 C 十…七八〇…上 D 下 170 171
- (10) A 九…七五二…中 B 十…四〇三…中 C 十…七八〇…上 D 下 171
- (11) A 九…七五二…中 B 十…四〇三…中 C 十…七八〇…上 D 下 171 173
- (12) 本願力とは「佛になるために修行している期間(因位)に立てた誓願による力。修行の結果(果位)得た功德はすべて本願力によるという。特に阿彌陀佛が悪人を救うのもこの力による。」また「本願」は①もとの願。仏や菩薩がむかし立てた願。菩薩が過去世に修行していた時に起こしたもとの願。すべての人びとを救おうとする願。希望。誓い。②根本の願。特に阿彌陀佛が一切衆生を救済しようとして発した誓願。③最初の誓願。④人の宿願。宿志。⑤堂塔・仏像などをつくり、法会を主催しようとする発起人。⑥仏道修行の一環として、道路・端・水利・旅宿などの設置に力を尽くす半僧半俗の行者や聖たちをいう。地方によっては「ぼうがんさん」とよんだ。中村元著『佛教語大辞典』なお中村氏は別の辞典で本願を [pūva-prañidhāna] 過去に立てられた誓願 ([prañidhāna]) の意。(宿願)ともいう。多くの場合、「将来、自ら悟りをひらき(上求菩提)、また他の衆生を救済したい(下化衆生)」などと、未だ悟りを得ていない菩薩などが起こす誓いのことをいうが、[prañidhāna] の語によってこのような概念が明確化するのには大乘仏典においてである。十地經の十大願や四弘誓願、さらには、法藏菩薩(阿彌陀佛)や阿閼如来、觀世音菩薩の誓願などが有名である。また本願は、廻向や授記という考え方も密接に関係する。浄土門などでは、本願の「本」を「根本」の義に解し、(根本の誓願)とする解釈も知られている。
- ところで、誓願 ([pañidhāna, pañidhi] など) という語自体は初期仏典にも珍しくないが、その内容は、生天や良き来世を願う在家的教説の枠内に留まるものであり、出家者の立場からはむしろ否定されるべき内容であることが多い。一方、ジャータカマハーヴァストゥなどの本生経類においては、過去世において、菩薩が将来、成仏したいとの願いを起こす事例が散見され、大乘仏典が説く本願思想の先駆と考えられる。そもそも、過去世における菩薩の発願という発想自体が、ジャータカなどの本生経類の発達と不可分であろう。
- なお、上述のように、衆生を救済する側の菩薩などが起こす誓願だけでなく、救済される側の衆生の起こす誓願もまた、本願思想の形成を考える上で重要ではあるが、本願という場合には、過去において発願される菩薩などの誓願を指すことが多いようである。(中村元著『岩波佛教辞典』)
- (13) 十種の瑞相は「六十華嚴」では「一者此林忽然廣博地平如掌。二者土石雜穢變爲金剛衆妙莊嚴。三者寶娑羅樹周匝行列。四者時此林中沈水末香。出過諸天種種莊嚴。五者諸妙華鬘寶莊嚴具皆悉充滿。六者諸寶樹中自然流出種種妙寶。七者諸池水中出芙蓉華。八者時此林中娑婆世界欲色諸天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那摩睺羅伽。恭敬作禮合掌而住。九者天女乃至摩睺羅伽女。齋供養具。合掌恭敬於一面住。十者十方一切佛齋中放光明。名曰菩薩受生自在燈。普照此林。於彼一一諸光明中。現一切佛受生自在出家自在。一切菩薩功德自在。又出如來微妙音聲。」(九…七五二…中下)と描き、「八十華嚴」では「世尊果從兜率陀天而來生此。時此林中。現十種相。何等爲十。一者此園中地。忽自平坦。坑坎堆阜。悉皆不現。二者

金剛爲地。衆寶莊嚴。無有瓦礫。荊棘株杌。三者寶多羅樹。周匝行列。其根深植。至於水際。四者生衆香芽。現衆香藏。寶香爲樹。扶踈蔭映。其諸香氣。皆逾天香。五者諸妙華鬘。寶莊嚴具。行列分布。處處充滿。六者園中所有一切諸樹。皆自然開摩尼寶華。七者諸池沼中。皆自生華。從地涌出。周布水上。八者時此林中。娑婆世界。欲色所住。天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽一切諸王。莫不來集。合掌而住。九者此世界中。所有天女。乃至摩睺羅伽女。皆生歡喜。各各捧持諸供養具。向畢洛叉樹前。恭敬而立。十者十方一切諸佛齋中。皆放光明。名菩薩受生自在燈。普照此林。一一光中。悉現諸佛受生誕生。所有神變。及一切菩薩受生功德。又出諸佛種種言音。是爲林中十種瑞相。此相現時。諸天王等。卽知當有菩薩下生。我見此瑞。歡喜無量。」(十：四〇三：中)であり、「四十華嚴」では、「爾時菩薩將下生時。此大林中。先現十種莊嚴瑞相。何等爲十。所謂一者此林中地忽自平坦。阮坎堆阜。悉皆不現。二者林中所有荊棘瓦礫。不淨之物。皆悉不現。金剛爲地。衆寶莊嚴。如歡喜園。柔軟細妙。三者園中復有寶多羅樹。其根深植。下至水際。次第行列。分布莊嚴。四者林中復現一切香芽。一切香藏。塗香末香。幢幡寶蓋。及諸妙寶摩尼形像。種種香樹蔭映莊嚴。出過人天所有香氣。五者林中復有諸妙華鬘寶莊嚴具。處處充滿。微妙分布。六者林中一切諸大寶樹。自然開發摩尼寶華。於華葉間。流出眞金柔軟鬘線。七者林中所有一切池沼。皆生妙華。柔軟鮮潔。從地涌出。彌布水上。八者時此林中。娑婆世界。所有欲色諸大天王。及諸天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽鳩槃荼等。一切世主。莫不來集合掌而住。九者此三千世界所有欲界諸天。采女。龍女。夜叉女。乾闥婆等及諸世主一切采女。皆生歡喜。各持種種諸供養具。向畢洛叉樹。恭敬而立。十者十方所有一切諸佛。皆從臍輪放大光明。名菩薩受生種種自在燈。普照林中一切諸物一一光中。悉現諸佛受生誕生。所有神變。及現一切菩薩受生種種功德。又出諸佛種種言音。令諸衆生咸得聞見。是爲林中十種瑞相現此相已。」(十：七八〇：上)とされ、梵語訳本では「このルンビニ園に、十の前兆が現れました。十とは何かといえますと、即ち、(一)このルンビニ園全体は、平坦であり、くぼんだり、ふくらんだりという凹凸がなく、割れ目や断崖もありません。このような第一の前兆が現れました。(二)次に、このルンビニ園全体は、砂や石がきれいに取り除かれ、切株や刺もなく、その大地の表面は金剛から成り、多くの寶石が一面に撒き散らされています。このような第二の前兆が現れました。(三)次に、このルンビニ園全体には、あらゆる宝樹、沙羅樹、ターラ樹の列が釣合よく美しく配置されていました。このような第三の前兆が現れました。(四)次に、このルンビニ園全体には、天上のものに優る香料の芽が生じ、一切の抹香の庫が生じ、一切の雲塊の如き輪が生じ摩尼(宝珠)形の香樹がみごとに根を張っていました。このような第四の前兆が現れました。(五)次に、このルンビニ園全体には、種々の天上の華、華鬘、裝飾品の庫が現れ、あらゆる莊嚴が満ちあふれていました。このような第五の前兆が現れました。(六)次に、このルンビニ園全体は、すべての蓮池の中で、芽を出したあらゆる寶石の蓮華が(水中の)地表から湧き出て、水面に出て来ていました。このような第七の前兆が現れました。(七)次に、この世界にいる限りの欲界もしくは色界に属する神々の息子たち、龍、ヤクシヤ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーガたち、世間の王もしくは世の衆生の王たちも、すべてこのルンビニ園に(来週し)合掌して立っていました。このような第八の前兆が現れました。(八)次に、この四大州から成る世界にいる限りの神々の娘たちにせよ、龍の娘たちにせよ、ヤクシヤ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーガの娘たちにせよ、すべて心喜び、あらゆる供養の資具を手にもち、プラクシヤ(畢洛叉樹)の木の花の枝に向かって身を屈めて立っていました。このような第九の前兆が現れました。(九)次に、十方から一切如来の臍の輪より放出される菩薩誕生の神変の燈明(菩薩受生自在燈)とよばれる光線が出現し、このルンビニ園全体を照らし出していました。そして、すべての光線の表面に、か的一切の如来

の誕生が現れる所が示し出されました。(菩薩) 誕生の神変と一切菩薩の功德とが仏の音声とともに、その光線の表面より放出されるのが聞かれました。このような第十の前兆が現れました。

以上の十の前兆が現れるのは、菩薩誕生の時節が近づいたときであり、それらが現れたから、一切の世間の王たちは菩薩が生まれるだろうと知ったのであります。善男子よ、実に私は、これから十の前兆を見て、不可思議な喜びの衝動に駆られました。」となつてゐる。(下 171-173)

また『方廣大莊嚴經』では釋尊が誕生しようとする時に「輪檀王宮先現三十二種瑞相。」とした上で、「翊從佛母往龍毘尼園。以好香水遍灑其地。散以天花。園中草木若時非時。枝葉花果悉皆榮熟。莊嚴殊勝猶如帝釋歡喜之園。爾時聖后既到園已。遊歷詳觀至波叉寶樹。其樹枝葉翳鬱鮮潤。天人花周匝開敷。微風吹動香氣芬馥。又以雜彩摩尼珠寶而嚴飾之。樹下周遍地平如掌。所出衆草其色青紺如孔雀尾。能生樂觸如迦隣陀衣。過去無量諸佛之母。亦皆來坐此寶樹下。是時百千淨居天子其心寂靜。或垂辮髮。或著寶冠。至此樹下圍遶聖后。歡喜頂禮奏天伎樂而讚歎之。即以菩薩威神。其樹枝幹風靡而下。於是稽首禮聖后足。

爾時聖后放身光明。如空中電。仰觀於樹。即以右手攀樹東枝。頻申欠呿。端嚴而立。是時欲界六萬百千諸天姝女。至聖后所承事供養。比丘當知。菩薩住胎成就如上種種功德神通變現。滿足十月。從母右脇安詳而生。正念正知而無染著」(三三：五五二：下-五五三：上)としてゐるし、『佛說普曜經』では「佛語比丘。滿十月已。菩薩臨產之時。先現瑞應三十有二……爾時王后坐師子床。六反震動三千國土。諸天散華。聖今日生。」(三：四九二：下-四九三：中)などの瑞相が現れたとしてゐる。『方廣大莊嚴經』と『佛說普曜經』では先ず三十二の瑞相が現れ、出産直前にも別の瑞相が現れたとしてゐる。

(14) 過去譚 A 九：七五三：下 B 十：四〇四：下 C 七八三：中 D 下 182

(15) A 九：七五四：中 B 十：四〇五：中 C 十：七八四：上 D 下 186

(16) 誕生時の光景 釈尊が誕生するに際して、次のような逸話が残されてゐる。『方廣大莊嚴經』・『佛說普曜經』などの佛伝を伝える神話的・伝説的色彩の濃い經典では、シャキムニが佛陀となられる前に、過去無数の生涯のあいだ限らない自己犠牲によつて功德を積み、その結果、兜率天に昇つて、そこで神々を教化しながら、地上に降る時機を待つておいでになつた。そのときボサツは下生の時機と大陸と国と家柄について觀察をなされます。時機については、人間社会があまり理想的な状態にあると宗教心が起らず、そうかといつて、またあまりに墮落しきつた世にも宗教を顧みる余裕がないので、中間のよい時機を見定め、大陸(洲)といふのは古代インドの世界観によると四つあつたが、そのうちで閻浮提(インドを中心とする社会)を選び、インドの中でも辺境ではなく中央部がよいとされ、家柄に関しては賤しくない階級といふことから世襲宗教家のバラモン(婆羅門)と戦士階級のクシャトリヤ(刹帝利)が上位階級であるが、その時世でクシャトリヤが優勢なので、ボサツもその家柄かに生れることとされ、中央部の十六の国を吟味の上、適切な国に該当する所が一つもなく、再びボサツに下降の条件を尋ねると、国土については六十四、母にふさわしい女性の条件として三十二の条件が挙げられ、シャキア族のシュツドダーナ王(浄飯王)とマヤー(摩耶)妃がふさわしいと神々の意見が一致した。また誕生に際してマヤー妃はそれとは知らず、実家に帰ろうとして流毘尼園に至るが、流毘尼園には瑞相が現れ、休息のためなどと伝えてゐる。『方廣大莊嚴經』・『佛說普曜經』は『大正新脩大藏經』本縁部 第三卷に所収 釈尊誕生に拘わる逸話については渡辺照宏著『新釈尊伝』31-34を参照した。

また『佛本行集經』では「春二月八日の鬼窟に当たる日に女の摩耶と共に相隨えて彼の嵐毘尼園に向かつて往つて大吉祥地を觀看ようと欲し、かの園に到つた。摩耶夫人は宝車から下り、先ず種々の微妙なる瓔珞を以つて其の身を莊嚴し、復た種々雑多の好みの薫香を以つて、塗拭に用い、衆多の姝女と伎楽音声に前後を圍まれゆつたりと徐々に歩いた。あちこちを見ながら。この樹木からあの樹木へと目を移しながら。かくのごとき次第で。周辺を歩き廻つた。然るにこの園には、別に一本の樹木があつた。名は波羅叉でその樹はしっかりと根付いていた。上下は正しく等しく、枝葉は半ば緑、半ば青で、翠と紫が混ざり合つて暉き孔雀の項のようであり、また甚だしく柔軟で迦隣提の衣のようであつた。その花の香りは妙なるものであり、聞くものを歡喜させた。摩耶夫人はゆつくりその樹木のしたに近寄つた。

この時その樹木は菩薩の威徳の力で、枝が自然に曲がり、柔軟に低く垂れてゐた。摩耶夫人は右手を挙げ、空中に出たたえなる色の虹の如く、ゆつたりと身を屈め、波羅叉の低く垂れた樹枝を取り、虚空を仰ぎ觀た。その時菩薩の母である摩耶夫人は地に立ち手を波羅叉の樹枝にすべらせようとしたその時に、二万の天の玉女が摩耶大夫人のところにやつてきて、周圍を取り圍み、手を合せて共に摩耶大夫人に白して言つた。

夫人が今御子をお生みになられた 良く生死の輪を断つて  
上下の天人の師が 二人とないと決定し

あれこれの諸天の胎で 良く衆生の苦を抜き  
夫人は辞倦すること莫く 我等と共に扶持される

この時 菩薩はその母の摩耶夫人が地に立ち樹枝に手を滑らせようとした時に、胎内で正念し座より起ち、これ以後一切の衆生の母となられ、子を生もうとした時に、身体には遍く痛みがあり、痛みが因縁なつて、大苦惱を受けて、坐したり起きたりして自分で安らげることができなかつた。その菩薩の母は、熙怡怛然として安靜歡喜し、身に大樂を受けた。この時摩耶は地に立ち手で波羅叉の樹枝を取りおえていた。即ち菩薩を生んだ。」とされている。

また『ラリタ・ヴィスタラ』では「ボサツが妃マーヤーの胎内にやどつて十ヵ月になると、シュッドーダナ王の宮廷と国土とにまたもやふしぎな前兆があらわれる。すなわち、自然界はふかい静けさにおおわれ、蒼はひらかず、風はおさまり、川は流れず、火は燃えず、國中の活動はみなとまり、女たちは安産し、ヒマラーヤ山から獅子の子が町に走りこんでくるが、誰にも危害を加えずに、家々の戸口の前におとなしく横たわる。月はまだブシャ星（蟹座）にさしかかつてゐる。そこで、妃マーヤーは出産の時が来たことを知る。戸外に出たいと思ひ、王にそのことを告げる。カピラヴァストウの都の郊外にあるルンビニーの園に侍女たちといつしよに行きたいと言ふ。マーヤーはにぎにぎしくルンビニーの園に赴くが、眼に見える行列の人々の中には、眼には見えぬながら、神々やその他ふしぎな存在も加わつてゐる。

時はまさに早春で、ルンビニーの園は今をさかりと春のよそおいに輝きかおり、樹という樹はみな、時ならぬものまで咲きそるい、そのうえ神々は天上の花で園を飾りつけておく。妃マーヤーは園に来て、樹から樹へと歩を運ぶ。妃があるプラクシャ無花果樹に歩みよると、ボサツの神通力によつてその樹がたれさがり、マーヤーが右腕をのばして、一本の枝をつかむ。こうして、わずかに唇をひらき、みやびやかに天をあおいで立ちどまる。この瞬間に無数の天女がよつてきて、妃の用をつとめる。そして、ボサツは、思慮と意識とをそなえ、俗世のけがれをうけずに、母の右脇から歩みでる。（ベック著 渡辺照宏訳「仏教」上 46 による）とされている。

また「右脇からの誕生」についてはヒンドゥー教の諸『ヴェーダ』の一つで生活規範を説く『マヌの法典』による古代の身分制度ヴァルナーに基づくカーストによる誕生のしたたの差異によるものとされている。『マヌの法典』では

而して、この世の増福のために、「ブラフマンは彼の」口、腕、腿および足よりバラモン、クシャトリア、ヴァイシャおよびシュードラを造れり。(一・三二)

而して、大いなる威光を有する彼は、この全創造物を保護せんがために、彼の口、腕、腿、及び足から出でたるもの(即ち、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラ)に、各々業(義務)を定めたり。(一・八七)

バラモンには、「ヴェーダ」教授と学習、自己又は他人のための行祭、布施を興へ、又受くることを定めたり。(一・八八)

クシャトリアには、人民の守護、施與、供儀、「ヴェーダの」学習、及び感覺的對象に對する無執著を指定せり。(一・八九)

ヴァイシャには、牧畜、施與、供儀、「ヴェーダの」学習、商業、金錢の貸與、及び土地の耕作を指定せり。(一・九〇)

されど主宰神は、これらの(他の)三種姓に甘んじて奉仕すべき唯一の職能を、シュードラに命じたり。(一・九二)

人は臍より上は清しといはる。この故に、自存神は、人の最も清き(部分)は、その口なりと言へり。(一・九二)

バラモンは(梵の)口より生れ、又彼は最初に生れ且つヴェーダを堅持する者なれば、彼は當然、このすべての創造物の主なり。(一・九三)

バラモンの(名の最初の部分)は、吉祥(の意を有すべく)、クシャトリアのは力に關するものたるべく、ヴァイシャのは富に關するものたるべし。されどシュードラのは卑しむべきものたるべし。(一・三二)

バラモンの(名の後の部分)は、幸福を意味する(語)たるべく、クシャトリアのは保護を意味する(語)たるべく、ヴァイシャのは、繁栄を表はす(語)たるべく、而してシュードラのは奉仕を示す(語)たるべし。(一・三三)

クシャトリアはバラモンなくしては繁栄せず。バラモンはクシャトリアなくしては繁栄せず。バラモンとクシャトリアと相和合して現世にも来世にも繁栄すなり。(九・三三二)(田辺繁子訳『マヌの法典』より引用)

とバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラという四つのヴァルナを中心とする身分制社会が創造主ブラフマンによって築かれ、各ヴァルナは誕生時にそれぞれに応じた部位から誕生するとしてたうえで上位二ヴァルナの優位性を認めている。またある著者は誕生の部位を上位から頭、右脇、左脇、お腹としている(大田清史著『釈迦伝』講話 66頁)といい、『ウィキペディア』では口、腕、腹腔、足としている。「右脇」からの誕生は、クシャトリアのヴァルナに生まれたことと左右の清穢とが結びついて右脇とされたのではなからうかと思われる。

「スッタニパータ」では次のように語られている。

「サーリプッタさんが言った、——

『わたくしは未だ見たこともなく、誰からも聞いたこともない。——このようにことば美わしき師(ブツダ)、衆の主がトウシタ天から来たりたもうたことを』(中村元訳『ブツダのことば』「スッタニパータ」206)

よろこび楽しんでいて清らかな衣をまとう三十人の神々と帝釈天とが、恭しく衣をとって極めて讚嘆しているのを、アシタ仙は日中の休息のときに見た。

こころ喜び踊りあがっている神々を見て、ここに仙人は恭しくこのことを問うた、

「神々の群が極めて満悦しているのは何故ですか？

どうしたわけでかれらは衣をとってそれを振り廻しているのですか？

たとえ阿修羅との戦いがあった、神々が勝ち阿修羅が敗れたときにも、そのように身の毛の振り立つほどよろこぶことはありませんでした。どんな稀なできごとを見て神々は喜んでいるのですか？

かれらは叫び、歌い、楽器を奏で、手を打ち、踊っています。須弥山の頂に住まれるあなたがたに、わたくしはおたずねします。尊き方々よ、わたくしの疑いを速かに除いてください。」

(神々は答えて言った)、「無比のみごとな宝であるかのボーディサッタ(菩薩、未来の仏)は、もろびとの利益安樂のために人間世界に生まれ たもうたのです、——シャカ族の村に、ルンビニの聚落に。

だからわれらは嬉しくなつて、非常に喜んでいるのです。

生きとし生ける者の最上者、最高の人、牡牛のような人、生きとし生ける者のうちの最高の人(ブツダ)は、やがて(仙人(のあつまる所) という名の林で(法)輪を回転するであろう。——猛き獅子が百獣のうち勝つて吼えるように。」

仙人は(神々の)その声を聞いて急いで(人間世界に)降りてきた。そのときスッドーダナ王(浄飯王 シャカ父の名)の宮殿に近づいて、そこに坐して、シャカ族の人々に次のようにいった、

「王子はどこにいますか。わたくしもまた会いたいです。」

そこで諸々のシャカ族の人々は、その児を、アシタという(仙人)に見せた。——溶炉で巧みな金工が鍛えた黄金のようにきらめき幸福に光り輝く尊い顔の児を。

火炎のように光り輝き、空行く星王(月)のように清らかで、雲を離れて照る太陽のように輝く児を見て、歡喜を生じ、昂まる喜びでわくわくした。

神々は、多くの骨あり千の円輪ある傘蓋を空中にかざした。また黄金の柄のついた扨子で(身体を)上下に扇いだ。しかし扨子や傘蓋を手にとっている者どもは見えなかった。

カンハシリ(アシタ)という結髪(髪)の仙人は、こころ喜び、嬉しくなつて、その児を抱きかかえた。——その児は、頭の上に白い傘をかざされて白色がかつた毛布の中にいて、黄金の飾りのようであった。

相好と呪文(ヴェーダ)に通曉しているかれは、シャカ族の牡牛(のような立派な児)を抱きとつて、(特相を)検べたが、心に歡喜して声を挙げた。——「これは無上の方です。人間のうちで最上の人です。」

ときに仙人は自分の行く末を憶うて、ふさぎこみ、涙を流した。仙人が泣くを見て、シャカ族の人々は言った。——

「われわれの王子に障りがあるのでしようか？」

シャカ族の人々が憂えているのを見て、仙人は言った、——

「わたくしは、王子に不吉の相があるのを思いつづけているのではありません。またかれに障りはないでしょう。この方は凡庸ではありません。よく注意してあげてください。」

この王子は最高のさとりに達するでしょう。この人は最上の清浄を見、多くの人々のためをはかり、あわれむ故に、法輪をまわすでしょう。この方の清らかな行いはひろく弘まるでしょう。

ところが、この世におけるわたくしの余命はいくばくもありません。(この方がさとりを開かれるまえに) 中途でわたくしは死んでしまうでしょう。わたくしは比なき力ある人の教えを聞かないでしょう。だから、わたくしは、悩み、悲嘆し、苦しんでいるのです。」

かの清らかな修行者(アシタ仙人)はシヤカ族の人々に大きな喜びを起こさせて、宮廷から去っていった。……(以上 中村元訳「ブツダのこ  
とば」(スッタニパータ) 149-152)

「スツパニパータ」では釋尊が兜率天から降下された存在であり、誕生時に佛になるべき相を具えていたこと、その誕生を歓喜のあまり民衆がこぞって踊り上がったこと、彼は富と勇氣とを具えたコーサラ国の住民であり、シヤカ族の一員であり、賤しい出自ではないと伝えているだけであるが、『方廣大莊嚴經』・『佛說普曜經』などの神話的・伝説的色彩の濃い經典では、シヤキムニが佛陀となられる前に、過去無数の生涯のあいだ限らない自己犠牲によって功徳を積み、その結果、兜率天に昇って、そこで神々を教化しながら、地上に降る時機が来るのを待っておいでになった。そのときボサツは下生の時機と大陸と国と家柄について観察されます。時機については、人間社会があまり理想的な状態にあると宗教心が起らず、そうかといって、またあまりに墮落しきった世にも宗教を顧みる余裕がないので、中間のよい時機を見定め、大陸(洲)というのは古代インドの世界観によると四つあったが、そのうちで閻浮提(インドを中心とする社会)を選び、インドの中でも辺境ではなく中央部がよいとされ、家柄に関しては賤しくない階級ということから世襲宗教家のバラモン(婆羅門)と戦士階級のクシャトリア(刹帝利)が上位階級であるが、その時世でクシャトリアが優勢なので、ボサツもその家柄かに生れることとされ、中央部の十六の国を吟味の上、適切な国に該当する所が一つもなく、再びボサツに下降の条件を尋ねると、国土については六十四、母にふさわしい女性の条件として三十二の条件が挙げられ、シヤキア族のシュッドダーナ王(浄飯王)とマヤー(摩耶)妃がふさわしいと神々の意見が一致した。などと伝えている。(『方廣大莊嚴經』・『佛說普曜經』は『大正新脩大藏經』本縁部 第三卷に所収 釈尊誕生に拘わる逸話については渡辺照宏著『新釈尊伝』31-34を参照した。)

- (17) A 九…七五四…下 B 十…四〇五…下 C 十…七八四…中 D 下 189
- (18) A 九…七五五…下 B 十…四〇六…下 C 十…七八六…上 D 下 195-196
- (19) A 九…七五五…下 B 十…四〇六…下 C 十…七八六…中 D 下 196-197
- (20) A 九…七五六…上 B 十…四〇七…上 C 十…七八六…下 D 下 198-200
- (21) A 九…七五六…上 B 十…四〇七…中 C 十…七八七…上 D 下 200
- (22) 過去譚 九…七五九…下 C 十…四一四…下 D 下 241-243
- (23) A 九…七六〇…中 B 十…四一四…下 C 十…七九五…中 D 下 241-243
- (24) A 九…七六〇…下 B 十…四一二…下 C 十…七九六…上 D 下 247

(25) いろいろな経典。ここでは「佛伝」と称される経典をさす。佛伝とは釈尊の生涯の伝記をいう。入滅直後にまとまった形の佛伝が作成されたのではなく、弟子たちの記憶などが口伝されていつて、ある時代に一定の型を整えて伝えられるようになったと思われる。古くは、南方所伝の経典スタニパータの一部が伝えられ、成道から初期教団の成立までについては、ヴィナヤ(律蔵)のマハーヴァツガに伝えられている。まとまったものとしてはブツダチャリタ(『佛所行讚』)ラリタヴィスタラ(『方廣大莊嚴經』)、マハーヴァストウ(『大事』)がある。マハーヴァストウが最古の佛伝。佛伝に基づいて描かれた浮彫や絵画を(佛伝図)というが、紀元前二世紀頃に造られたパールフトやサンチーのストウパーの欄楯に釈尊の伝記を描いた佛伝図が彫られているので、その頃までにはまとまった形で佛伝が成立していたと思われる。なおわが国での古来の佛伝は、過去現在因果経、佛所行讚、佛本行集経、大般涅槃経や梁の僧祐(445-518)が三蔵から抄集した『釈迦譜』などに由来するところが多い。(中村元著『岩波仏教辞典』) ベックは『仏教』において第一部を「佛伝」、第二部を「教理」にわけて考察し、第一部では第一編を伝説上の佛陀、第二編を歴史上の佛陀として考察し、第一編では『ラリタ・ヴィスタラ』(『方廣大莊嚴經』)・『マハーパリニツパーナ・スッタ』(『大涅槃経』)『ブツダ最後の旅』)を中心に考察し、第二編では『阿含経』を基軸に据えて『ラリタ・ヴィスタラ』の伝説的な部分は批判的に考察しているし、中村元著『釈尊の生涯』は伝説的経典をできる限り排して釈尊の言行をとらえようとするものであるが、渡辺照宏著の『新釈尊伝』と宮坂宥勝著の『釈尊』は伝説の象徴的意味をふまえて真実のブツダ像を浮かびあがらせようとするものであり、瀬戸内寂聴の『釈迦』は宗教者・小説家としての立場からブツダの実像を説き起こそうとするものである。佛伝には、シャカカの言行に依拠しようとするものとシャカカの伝説をも含めて真実のシャカカの姿を明らかにしようとするものの二種がある。

(26) 『佛説憍囉經』に「爾時菩薩會諸姪女。時釋家女名曰俱夷。與諸姪女到菩薩所。却住一面諦視菩薩。目未曾眴。菩薩普察即時欣笑。執持寶英以遣俱夷。俱夷報曰。吾不貪慕衆寶瓔珞。當以功德自莊嚴身。」と伝えている。(三三:五〇〇:下) 訳文は渡辺照宏『新釈尊伝』79頁によった。また『ラリタ・ヴィスタラ』はシツダルータの結婚に関してつきのように語っている。

「太子が青年になると、シャーキャ族の古老たちは、占者たちが預言した話を持ちだして、シュツドダナ王の注意をうながす。彼らはいう。太子を結婚させるときがきた。なぜかという、太子がもし愛欲の喜びをたのしむならば、きつと遁世の考えなどすっかり忘れ、世界を支配する王となつてその使命をはたすであろう、と。王は、太子を承知させることはむずかしいという。しかし太子にその計画を話す。太子は七日のあいだ考えさせてほしいという。官能の快楽の危険は太子の心に迫っている。森の中の沈黙と孤独において瞑想に身をゆだねる望みがもうすでに誘いかけているように思われる。しかし太子の内面の智慧は、過去の世のボサツたちも佛陀への道をたどるまえに妻をえらんだということを告げる。そこで太子は父の申し出に賛成し、きさきとなるべき女性に必要な美徳をかぞえあげる。その人はけだかく、若くて美しくなければならないが、自分の美しさを誇つてはいけない。生けとし生けるものに対して、やさしい母や姉妹のように親切で、施しをよるこび、邪念なく、嫉妬なく、誠実正直で、高ぶらず、考えも言葉も行ないも純潔で、安逸をむさぼらず、聡明で技倆があり、朝起きでなければならぬ。階級や家柄ではなくて、ただ美徳と内面の価値だけが自分にはいちばん重要である、と太子はいう。いろいろ探しもとめたあけく、シャーキャ族の王族のひとりダンダパーニの娘ゴーパーが太子の希望にかなう乙女であろうということになる。しかし、王は大事をとつて別の計画を立てる。王はアショーカーの花の籠に宝石を美しく飾りたてたものを用意させ、これを太子ので、國中の乙女たちにわけてやらせようというわけである。太子の眼にとまった乙

女をその妃にえらぶつもりである。王は公示して、その日から七日目に、カピラヴァストゥに住む乙女はみな城にあつまり、太子の手から贈りものを受けよという命令をだす。そして定めの日になって、太子は城の謁見室の王座に坐って花の贈りものをわけあたえ、乙女たちはみなその前を通りすぎる。しかし、乙女の誰ひとりとして、太子のけだかさからかがやきでる榮光にたえることができず、みな黙ってうつむいたまま贈りものをもらって匆々にたちさる。最後にダンダパーニの娘ゴーパーがあらわれるが、太子の顔をまともに見るのはこの乙女だけである。しかし太子の花の贈りものをすでにみな与えつくしたあとであった。「太子よ、私をこのように軽蔑なさるのは私に何のところがあからずか」とほほえみながら太子に話しかける。太子は答える「軽蔑するわけではない。あなたの来ようがおそかったのです」。こういつて自分の指にはめていた高価な指輪を贈る。しかし乙女は「私はあなたにとって、たったそれだけのねうちしかありませんか」。そこで太子は自分の身の飾りをぜんぶ与えようとするが、乙女はそれをおしとどめて「私は太子の見る飾りを取ろうとは思わない。むしろ私自身が太子の見る飾りになろうと思つ」。そしてすみやかにたちさる。この様子をひそかにうかがっていたものが、太子がゴーパーに眼をとめたことと、二人が言葉をかわしたことを王に報告する。

そこで王はゴーパーを太子の妃にして欲しいとダンダパーニに申し入れる。しかしシャークヤ族の習慣として、武士の技芸の試験に合格しなければ娘を嫁にやらないことになっている。そこでダンダパーニは王の申し入れを受けることをためらう。王は断られて心配する。すでにずっと前から太子の引込みがちなこと、シャークヤ一族の息子たちのうちの同じ年ごろのものが太子を弱虫だと思つて相手にしないことを心配しているかのほどをみて、その願いをききとどけ、公示して、今日から七日目に太子がその技能をためすのだから、武芸におぼえのあるものは競技に出場するようにと触れさせる。その競技はカピラヴァストウの城門前の広場で行なわれることになり、五百人のシャークヤ族の青年が参加し、勝つたものにはシャークヤ族の姫ゴーパーが与えられることになる。王をはじめおおぜいの人々が競技を観覧する。すべての競技でサルヴァールタシッダ太子が勝つ。太子に敵意をもつ従兄弟のデーヴァダッタはシャークヤ族にありがちな傲慢から、傲慢にも勝利を確信して太子に挑戦するが、これを太子は相撲で楽々と負かし、やさしい態度でおしたおす。ダンダパーニは最後に弓術の試験をしたいという。五人の競技者がそれぞれ鉄の太鼓を遠くにかけて的にするが、ボサツは誰よりもいちばん遠く十町里離れたところに的をかける。そのうえ太子の的のうしろには七本のターラ樹と鉄製の猪とおいてある。競争者はいずれも自分のかけた的を射あてるが、それを射ぬかない。ボサツが射る番になると、手にした弓がみな折れてしまう。そこで、太子は自分の力にかなうような強い弓が他にないのかと王にたずねる。王は「わが子よ、汝の母方の先祖シンハハスの持つていた弓がいま神殿に奉納してあるが、誰も張ることができない」。ボサツは「弓を持つてくるがよい、試してみよう」。弓を持つてこられるが、青年たちの誰ひとり張ることができない。ダンダパーニでさえ弦をすこし動かしただけで、一杯に引きしぼることはできない。誰にもできないことがボサツにはどうさもなくてできる。地面から立ちあがりさえもせず、半跏の坐禅の姿勢のまま、さしだされた弓を左手に取り、右手のただ一本の指先で引きしぼる。弦のひびきはカピラヴァストウじゅうになりわたり、やがてこのことが口から口へと語りつがれる。「シッダールタ太子が先祖の弓を引きしぼった。そのひびきが遠くなりわたったのだ」と。そして、天上から神々の声が聞こえてきてボサツを讚美して「地面から立ちあがらずに弓を引きしぼったように、この方は聖者となって必ず目的を達し、悪魔マーラをその軍勢ともども打ちやぶることであ

るう」。こうしてボサツが弓をひきしぱり、矢をつがえて、力をこめて射ると、その矢は競争者たちがかけた的すべてと、最後に自分の的と、それからその後においた七本のターラ樹と鉄製の猪とをうちぬき、はるか遠く見えなくなつて、地中にはまりこむ。そして、ボサツの矢が地を掘つた場所に泉が噴きだすが、それは今日でも「矢の泉」とよばれている。人々が賞めそやす喚声にまじつて、またも神々の賞讃の音が聞こえ、天上の花がボサツの勝利をたたえて雨とふりそそぎ、天上から神々の声がひびきわたる。「むかしの仏陀たちの座にやどる大地の力によってこの人は射手としてすぐれた腕前を見せた。この人は無我の空性の矢で煩惱の敵を打ちやぶり、目にみえるものの網を断ちきり、聖で、けがれなく、患いのない最高の仏陀の悟りに達するであろう」。一方、シャーキヤ族ダンダパーニの王女ゴーパーはボサツの妃となる。ふつうは宮廷の習慣として若い女性には顔にヴェールをかかげなければならぬことになっているのに、ゴーパーは誇り高く包みおかない。そして王はそのとき太子の妃をやさしくいたわる。(以上 ベック 前傾書 上 53～58頁)

(27) ラーフラ (羅睺羅) [Rāhula] に相当する語の音写。釈尊と耶輸陀羅の間に生まれた子。Rāhula の意味は障碍という。釈尊がわが子の誕生を知つて「障り (ラーフラ) が生まれた。繫縛が生まれた」といわれたことが命名の由来。出家後智慧第一の舍利弗に就いて修行した。その修行態度は不言実行であつたので、多くの比丘の尊敬の的であつた。釈尊は「私の弟子の中で学を好む第一人者」といわれた。そこで学習第一の比丘と呼ばれた。しかしまた他の仏弟子たちを見下す態度もあつたので、釈尊に誡められた。仏十大弟子の一人。(中村元著『岩波仏教辞典』)

(28) 耶輸陀羅 『方廣大莊嚴經』卷四では上記註(16)の俱夷(瞿夷)が耶輸陀羅に置き換えられている。(三三：五六一：下～五六二：上)

耶輸陀羅 [Yasodharā] [Yasodharā] に相当する。ヤショーダラー。釈尊の出家前の妃、羅睺羅の母。古い經典には仏陀の妃のことはほとんど伝えられておらず、妃の名をあげ、それにまつわる伝説を語るのには比較的後代に成つた經典である。妃の名としては他にバツダカッチャー(Bhaddakaccā) ゴーパー (Gopā 瞿波) などであるが、ヤショーダラーがもっとも広く知られた名である。釈尊が女人の出家を許したとき、彼女も他の釈迦族の婦人とともに比丘尼となつたことを伝える經典もある。この妃の出生については種々の説があるが、仏陀の従妹とするものが多い。(中村元著『岩波佛敎辞典』) また渡辺照宏氏は『新釈尊伝』で『佛本行集經』卷十四によると、シツダールタ太子の第一の王妃はヤショーダラー、第二王妃ガマノーダラー(摩奴陀羅、訳して意持)、第三王妃がゴータミー(瞿曇彌)となつていますが、『修行本起經』ではゴーパー(喬比迦 裘夷) がまず妃となり、続いてヤショーダラー(衆稱味)とマノーラター(常樂意)とが迎えられ、それぞれ二万人の侍女とともにそれぞれの宮殿に住んでいたもので、太子は三宮殿に代わる代わる休まれました。……事情を総合してみると、最初に結婚したのは、ゴーパーで、第一妃としての地位を占めたのはヤショーダラーであつたようです。そして第三妃のマノーラター(またはマノーダラー)についてはあまり記事がありません。(渡辺照宏氏『新釈尊伝』77～78頁) としているし、宮坂宥勝氏「南方仏敎の『ブツダ・ヴァンサ』(仏陀の歴史)ではバツダカッチャーナ (Bhaddakaccāna) と伝えている」(宮坂宥勝 釈尊 69頁) なお『方廣大莊嚴經』卷四には「耶輸陀羅爲第一妃」(三三：五六四：下～五六五：上)との記述があり、出家前の釋尊の複数の妻の第一位に位置づけられていたのであるうし、『衆許摩訶帝經』卷第四では「爾時太子有三夫人。耶輸陀羅。虞閉迦。蜜里識惹」(三三：九四五：上)と端的に三人の妻の存在を記述している。

- (29) A 九…七六一…下 B 十…四一三…下 C 十…七九七…中下 D 下 257～258
- (30) A 九…七六二…上 B 十…四一三…下 C 十…七九七…下 D 下 258～260

(31) A 九…七六二…上 B 十…四一四…中 C 十…七九八…上…十…七九八…中 D 下 261

(32) 羅刹 *Śrakṣas rakṣasa* に相当する音写。インドの神話・伝説に現れる鬼神の一種で、凶暴な祭祀破壊者・食人鬼とされることが多い。叙事詩『ラーマーヤナ』に登場するラーヴァナ (Ravana) は羅刹王として名高い。羅刹は仏典においてもしばしば登場し、釈尊前生の雪山童子に雪山偈を授けた羅刹の話や、『大唐西域記』十一所見の、南海に羅刹女の島があり、女鬼が漂着する商人を夫としては食い殺す話は、『今昔物語』以下の説話集に収録されている周知のもの。なお、仏画として描かれることのある法華経陀羅尼品の〈十羅刹女〉はむしろ法華行者守護の善神である。また密教では、この世を守護する十二天 (十方の諸天に日・月両天を加えたもの) に対する供養法を説く。その十二天の一つに、西南を守護し、甲冑を着けて剣を執る〈羅刹天〉がいる。(中村元著『岩波仏教辞典』)

(33) A 九…七六二…上…下 B 十…四一四…中…下 C 十…七九八…中…下 D 下 262～263

(34) A 九…七六二…下 B 十…四一四…下 C 十…七九八…下 D 下 270

(35) A 九…七六三…下 B 十…四一五…下 C 十…八〇〇…上 D 下 271

(36) A 九…七六三…下…七六四…下 B 十…四一五…下…四一七…上 C 十…八〇〇…上…八〇二…上 D 下 271～280

(37) A 九…七六四…下…七六五…上 B 十…四一七…上…中 C 十…八〇二…上…中 D 下 280～283

(38) 摩耶夫人 *Māyā* に相当する音写。マヤー。釈尊の母の名。釈迦 (釈迦) 族の王シュッドーダナすなわち浄飯王の妃なので夫人と呼ばれている。シャカ族の近隣のコーリア族出身。釈尊の継母にあたるマハージャパター *Mahajāpatī* (摩訶波闍波提) は妹である。釈尊を托胎したとき、白象が胎内に入る夢をみた。釈尊はルンビニ園 (藍毘尼園) で、彼女の右脇腹から出生していると伝えられている。さらに釈尊誕生後七日目に他界し、切利天に生まれたと伝に記されている。(中村元著『岩波仏教辞典』)

摩耶について「今日、ルンビニやタウリハワー地方の人人はマヤーをマヤーデーヴィー (Māyādevī) とよんでいる。デーヴィーは女神を意味する。マヤーは女神として信仰され、ルンミンディーも女性形で地母神であるから両者のイメージが重なっている。渡辺照宏博士はマハーマヤー (Mahāmāyā) とよばれる釈尊の母はマハーマター (Mahāmātā) つまり偉大なる母、地母神を意味する語の転訛ではないかと推測する。宮坂 宥勝 前掲書 56頁) とされている。

『今昔物語集』一 四～六頁 (新日本古典文学大系 33 所収)

(39) フリー百科辞典『ウィキペディア』の麻耶山・切利天上寺の記事による。それによれば、摩耶山の名は空海が天上寺に釈迦の生母・摩耶夫人 (まやぶにん) 像を安置したこと由来する。切利天上寺 (とうりてんじょうじ) は、兵庫県神戸市灘区摩耶山町にある仏教寺院。通称「天上寺」。宗派は高野山真言宗。摩耶夫人 (釈迦生母) 像を本尊とする日本唯一の寺である。切利天上寺は六四六年 (大化二年) に孝徳天皇の勅願により、インドの伝説的な高僧法道仙人が開創したと伝わる。後に弘法大師が渡唐した際、梁の武帝自作の摩耶夫人尊像を持ち帰り、同寺に奉安したことから、この山を「摩耶山」と呼ぶようになったとされる。鎌倉時代末期の摩耶山合戦 (幕府軍対赤松氏) で知られる摩耶山城をこの寺とする説がある。最盛期には多くの塔頭、僧坊を抱えており、最も栄えた頃は三千の僧を擁する摂津地方第一の大寺だったと伝わる。宗派を越え、皇族・武将なども含め、広く信仰され、花山・正親町両天皇の御願所でもあった。一九七六年 (昭和五十一年) 一月三十日未明、賽銭泥棒による放火のた

め、仁王門や一部の塔頭を除いて全焼した。現在は北方約1kmにある摩耶別山(天上寺創生の地とされる)に移して再建され、旧境内は摩耶山歴史公園として整備されている。本尊は「十一面観音菩薩像」と「仏母摩耶夫人尊像」。「十一面観音菩薩像」は一寸八分(約6cm)の黄金の秘仏で、通常は拝観できない。開帳は三十三年毎に行われるという。法道仙人が持参してきたものといわれ、大阪湾一円および摩耶山の四周に開けた諸国(摂津・播磨・河内・和泉・淡路等)の守護仏とされた。「仏母摩耶夫人尊像」は極彩色等身大の仏像。一九七六年(昭和五十一年)の火災により焼失したため、新しく作られた。完成後は金堂に収められていた。摩耶夫人堂は、平成十四年(二〇〇二年)十月に再建されて、落慶法要が営まれた。仏母摩耶夫人尊像が金堂から遷座された。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%A8%E3%81%86%E5%88%A9%E5%A4%A9%E4%B8%8A%E5%AF%BA%E4%B9%A0>。

(40) 『マタイ伝』1-18-25 (訳文は 日本聖書協会 『舊新約聖書 文語訳』1-2による)

(41) 懐妊譚 釈尊の懐妊については『方廣大莊嚴經』・『佛說櫟囉經』などが詳しく述べているが、その概要は次のようである。インド暦でヴァイシャーク(吠舎佉)の月(新暦でいえば四月末頃にあたる)の満月の日に、プシャ星(蟹座)に月が宿っているのを見て、ボサツは兜率天から姿を消し、六つの牙をもつ白象となって母(摩耶夫人)の右脇から胎内に入り、摩耶夫人はその時、眠ったまま、そのできごとを夢に見た。このことを聞いたシュッドーナダ王(浄飯王)は占い師を呼び、やがて生まれる王子が、世界を統治する転輪聖王となるか、さもなくば出家して佛陀となって世の人々を救うようになることを知ります。

ボサツは母の胎内によって特別に設けられた宝殿の中で坐禅(結跏趺坐)を組んでいます。大梵天王が宇宙の食べものの精髓を寶石(昆瑠璃)の器に入れて、胎内の宝殿におられるボサツにさしあげます。この宝殿は、誕生の後に大梵天王が梵天世界に持って行って聖物を大切に保存します。

摩耶夫人はこれらの胎内のできごとをみな鏡に映すようにはっきり見えています。夫人には不愉快や重苦しい感じがないばかりでなく、むしろ気分は爽快で、よこしまな思いがありません。それどころか、夫人を見ただけで病人がたちまち丈夫になります。こうしてコーサラ国の内外は平和に満ち、気候も穏やかで、人々は互いに親切をつくします。(渡辺照宏著『新釈尊伝』による要約をもとに記述した。)

- (42) A 九…七六五…上 B 十…四一七…中 C 十…八〇二…下 D 二八四…二八六
- (43) A 九…七六五…中 B 十…四一八…上 C 十…八〇四…上 D 下 288
- (44) A 九…七六五…下 B 十…四一八…上 C 十…八〇四…上 D 下 289
- (45) A 九…七六六…中 B 十…四一八…下 C 十…八〇六…上 D 下 295
- (46) A 九…七六六…下 B 十…四一九…上 C 十…八〇六…上 D 下 297
- (47) A 九…七六七…上 B 十…四一九…中 C 十…八〇七…上 D 下 299
- (48) A 九…七六七…上 B 十…四一九…中 C 十…八〇七…上 D 下 300
- (49) A 九…七六七…上 B 十…四一九…中 C 十…八〇七…上 D 下 301
- (50) A 九…七六七…中 B 十…四一九…下 C 十…八〇九…上 D 下 303

(51) A 九：七六七：下七六九：下 B 十：四二〇：上四二二：中 C 十：八〇九：中八二四：中 D 下 304～317

(52) 彌勒菩薩 固有名詞としての彌勒の用例としては、未來仏としての彌勒仏が古い。パーリ長部26〔『轉輪聖王獅子吼經』〕や対応する長阿含經6〔『轉輪聖王修行經』〕あるいは中阿含經66〔『說本經』〕には、遠い未來、人の壽命が八万歳になったときに彌勒という名の仏が世に現れるという。とくに最後のの中阿含經では、衆中の彌勒という名の比丘に対して、まさにその未來仏たる彌勒仏になるであろう授記をなしている。ただし同經典は、彌勒菩薩の呼称を用いてはいない。しかし、この同じ經典を引く『大毘婆論』や『大智度論』では、すでに菩薩の觀念が定着していたこともあって、この授記を受けた比丘〔彌勒〕は、〔慈氏菩薩〕や〔彌勒菩薩〕と呼ばれる。彌勒菩薩については、諸種の彌勒經典がある。そこにおいて、釈迦牟尼仏について、五十六億七千万年の後、この世に現れる將來仏であり、既に菩薩としての修行も成就し、一生補処の位（あと一生のみで仏となりうる位）に達しており、今は兜率天の内院に住しているという。彌勒が世に現れるときには、華林園の竜華樹の下で成仏し、三会の説法によって一切の人・天（人々と神々）を濟度するとされる。今、彌勒が住している内院は、彌勒の淨土（兜率淨土）といわれ、觀彌勒菩薩上生兜率經には、その莊嚴（しつらい）の様子が描かれ、そこに往生すべきことが説かれている。

この彌勒に対する信仰は、中国・朝鮮・日本に非常に大きな影響を与えている。わが国では八～十世紀頃、兜率上生（彌勒上生）を願う信仰が流行し、吉野金峯山は彌勒淨土と考えられた。十一世紀以後には、末法の世を救う彌勒下生を熱烈に求める信仰も盛んとなり、この〔彌勒の世〕への期待は、たとえば幕末では、世直し運動とも結びついたのである。（中村元著『岩波仏教辭典』）

表 善知識とその教え

善知識名 (六十)	善知識名 (八十)	善知識名 (四十)	教え (六十)
妙徳円満神	妙徳円満神	妙威徳圓滿愛敬 (吉祥嵐毘尼園主林) 神	我唯知此菩薩受生自在法門
瞿夷 (女)	瞿波釋種女	瞿波釋種女	我唯知此法門 (= 觀察菩薩三昧海法門)
摩耶夫人	摩耶夫人	摩耶夫人	我唯知此大願智幻法門
天主光童女	天主光女	天主光女	我唯知此無礙念清淨解脫
遍友童子師	遍友童子師	遍友童子師	
善知衆藝童子	善知衆藝童子	善知衆藝童子	我唯知此善知衆藝菩薩解脫
賢勝優婆夷	賢勝優婆夷	最賢勝優婆夷	我唯知此無依處道場法門
堅固解脫長者	堅固解脫長者	堅固解脫長者	我唯知此淨念解脫
妙月長者	妙月長者	妙月長者	我唯知此智光解脫
無勝軍長者	無勝軍長者	無勝軍長者	我唯知此無盡相解脫
尸毘最勝婆羅門	最寂靜婆羅門	最寂靜婆羅門	我唯知此誠語法門
徳生童子	徳生童子	徳生童子	我等二人但能知此菩薩解脫
有徳童女	有徳童女	有徳童女	我等二人但能知此菩薩解脫